

# 2007 年度 修 士 論 文

ひとと自然のかかわりからみた霞ヶ浦・妙岐の鼻の生態系保全  
Ecosystem Conservation of Myogi-no-hana around Lake Kasumigaura  
from the Viewpoint of Relationship between Human and Nature

植 松 拓 理  
Uematsu, Hiromasa

東京大学大学院新領域創成科学研究科  
社会文化環境学専攻

## 【目次】

第1章 序論	1
1-1 研究の背景	1
1-2 研究の目的	3
1-3 用語の定義	3
1-3-1 萱	4
1-3-2 萱場	4
1-4 研究対象地	4
1-4-1 霞ヶ浦	5
1-4-2 妙岐の鼻	6
1-4-3 浮島地区	8
1-5 調査方法	11
第2章 妙岐の鼻の歴史	13
2-1 はじめに	13
2-2 干拓と堤防建設による萱場の減少	13
2-3 妙岐の鼻の所有権の変遷	17
2-3-1 浮島財産区	18
2-3-2 水資源機構による妙岐の鼻の買収	19
2-3-3 買収に伴う浮島住民への補償	21
2-4 萱の利用形態	21
2-4-1 自家消費的な萱の利用	21
2-4-2 萱師による萱の利用	28
2-5 萱の品質	30
2-6 屋根葺き	30
2-7 萱の減少	31
2-8 近年の萱刈り	32
2-8-1 萱刈りに至るまでの過程	32
2-8-2 萱刈りにおけるルール	33
2-8-3 2006年度（平成18年度）の萱刈り	34
2-8-4 2007年度（平成19年度）の萱刈り	36
2-8-5 文化材保護という萱の利用	37
2-9 ヨシの利用	37
2-10 「ヤーラモシ」	39
2-11 コジュリン問題	42

2-12 小括	45
第3章 「ヤーラモシ」に対する多様な価値観の交錯	47
3-1 はじめに	47
3-2 「ヤーラモシ」が中止に至ったきっかけ	47
3-3 「ヤーラモシ」の中止に対する各アクターの思い	48
3-3-1 水資源機構	48
3-3-2 稲敷市役所	49
3-3-3 浮島財産区管理会	51
3-3-4 萱師・萱葺き職人	52
3-3-5 文化財関係者	54
3-3-6 生態学者	55
3-4 小括	56
第4章 妙岐の鼻における生態系保全のあり方	57
4-1 はじめに	57
4-2 妙岐の鼻の利用形態の変化	57
4-2-1 水資源開発公団買収以前（1987年、昭和62年以前）	57
4-2-2 水資源開発公団買収以降（1987年、昭和62年以降）	58
4-3 「ヤーラモシ」のレジティマシーと妙岐の鼻の生態系保全	59
4-4 「ヤーラモシ」のレジティマシーと地域社会	61
謝辞	62
添付資料	63
参考文献	70

## 第1章 序論

### 1-1 研究の背景

従来、自然は人間の干渉が少なければ少ないほど、保護する価値が高いとされていた（鷲谷・矢原 1996）。そのため、人間活動の影響があまり及んでいない原生的な自然を至上とするところがあり、人間の営みによって維持されてきた二次的自然は、その価値を認められないことが多かった。

しかし、近年、二次的自然を構成する種の多くが絶滅の危機に瀕していることが明らかとなり、生物多様性の観点から二次的自然が注目を浴びるようになってきた。例えば、2002年（平成14年）に政府によってまとめられた新・生物多様性国家戦略（環境省 2002）の中でも、生物多様性の第2の危機として「自然に対する人為の働きかけの縮小撤退」が挙げられており、二次的自然の価値と保全の必要性が論じられている。

原生的な自然の保全は人為をできるだけ排することにある。しかし、二次的自然の保全は、そう簡単に片付かない。二次的自然は人間と自然の多様なかかわりによって成立しているため、その状態がかかわりの仕方によって大きく左右される。つまり、どの状態を保全すべきなのかが自明でないのである。また、二次的自然の保全目標は「地域の自然と今後どのようにかかわっていくのか」という価値判断に大きく依拠する。そのため、自然科学的なアプローチのみによって、目標を一意的に設定することは難しい。このような課題は自然再生事業にも共通し、人文社会科学的な視点から再生目標を検討する試みが行われつつある（皆川・島谷 2002；桑子 2005；渡辺 2006；富田 2007）。例えば、桑子（2005）は、空間の歴史性を「空間の履歴」という言葉で表現し、自然再生の現場においては「空間の履歴」を読み解くことが重要であると指摘している。二次的自然の保全においても、歴史性を把握することの意味は大きいと思われる。なぜなら、自然がどのように変化したかということだけではなく、自然と深くかかわっていた地域の人々の営み、ひいては文化がどう変容したかということまで考慮に入れた保全目標を立てられるためである。

しばしば、生態系システムと社会システムは別々に議論されるが、前述したように、二

二次的自然においてそれらは分離していない。そのため、二次的自然の保全はそれらを同じ土俵に置いた上で行われるべきなのである。

「ひとと自然のかかわり」に関する研究は、これまで環境社会学や環境倫理学の分野で盛んに論じられてきた。環境社会学の分野では、地域社会における、人間と自然のかかわりを、住民の生活実態やその変遷から明らかにする研究が行われている。その代表例として、環境問題を地域住民の生活現場から分析し、解決を探ろうとする「生活環境主義」（鳥越 1997）が挙げられる。

また、環境倫理学の分野において、鬼頭（1996）は、ひとと自然との関係性を動的に、そして多元的に理解する方法として社会的リンク論を提唱している。社会的リンクとは、物質的な価値をめぐる社会的・経済的リンクと、精神的な価値をめぐる文化的・宗教的リンクという人間－自然系の総体のことである。この論は、分析的であると同時に規範的なところに特徴がある。さまざまな社会的・経済的リンクと文化的・宗教的なリンクが切れているのか（かかわりの部分性＝「切り身」の関係）、つながっているのか（かかわりの全体性＝「生身」の関係）で、人間の営みのあり方を評価する一方で、課題として析出する。

さらにコモンズの研究も、「ひとと自然のかかわり」の具体的様相を分析する研究といえよう。コモンズは、「自然資源の共同管理制度、および共同管理の対象である資源そのもの」と定義される（井上 2001）。日本におけるコモンズ論は、総有・財産区などにかかわる法制度や入会慣行といった入会林野の研究と結びつき、社会科学諸分野からの研究蓄積が進んだ。そして、近年、コモンズ論において明らかにされた「ひとと自然のかかわり」の濃淡やダイナミクスは、ある環境に、誰がどんな価値のもとに、あるいはどんなしくみのもとに、かかわり、管理していくか、ということについて社会的認知・承認を得ていく過程としての「レジティマシー（正当性／正統性）獲得のプロセス」として展開している（宮内 2006）。

本研究で対象とする「妙岐の鼻」は、現在でも萱を採取する「萱場」として利用されている二次的自然であり、生態学的にはヨシ原とされている。また、数多くの希少種、絶滅危惧種が生息、生育している（路川・前田 1994）。

妙岐の鼻に関する先行研究を見てみると、植物や鳥類に関する生態学的なものが中心であり（路川ら 1992；路川・前田 1994；根岸ら 2002）、現在も生態学、水文学といった自然科学的な研究が行われている。しかし、採草が今でも行われていることを考えると、妙岐の鼻を保全するためには、この人間の営みを見做すわけにはいかないであろう。

また、現在は中止されているが、妙岐の鼻は 2005 年（平成 17 年）まで野焼きが行われていた場所でもある。生態学的に見ると、ヨシ原における野焼きは植物の種多様性を保つために有効な管理であるとされている（鷺谷・矢原 1996）。そのため、妙岐の鼻における生態系の保全と、野焼きの中止に関する人文社会科学的な問題は表裏一体の関係として捉えることができる。

## 1-2 研究の目的

本研究では、①妙岐の鼻で過去から現在にかけて行われてきた人間の営みと、②野焼きが中止に至った経緯と中止に対する人々の思いの 2 点に着目して調査を行い、それらの結果から、妙岐の鼻における生態系保全のあり方について検討することを目的とする。

## 1-3 用語の定義

本節では、本研究における主要な用語について定義する。この 2 つの用語は、使用される文脈によって多義的なものである。ここでは一般的な定義を踏まえながら、本研究において意味するところを示した。

### 1-3-1 萱

屋根を葺く草の総称であり、地方によって萱と呼ばれる植物は異なる。代表的なのは、ススキ *Miscanthus sinensis* Anderss.、チガヤ *Imperata cylindrica* (L.) Beauv.、ヨシ *Phragmites communis* Trin.などである。ススキをヤマガヤ、ヨシをウミガヤと呼ぶ場合もある（安藤 1983）。妙岐の鼻では、カモノハシ *Ischaemum aristatum* L. var. *glaucum* (Honda) T. Koyama が「萱」もしくは「シマガヤ」と呼ばれる。

### 1-3-2 萱場

萱を採取する特定の場所を指す（安藤 1983）。ヨシを採取する場合は萱場と呼ばずにヨシ原と呼ぶ場合が多い（日本ナショナルトラスト 2003）。本論では萱（カモノハシ）を採取する場所としての意味合いが強い場合、妙岐の鼻を「萱場」と称す。

## 1-4 研究対象地

### 1-4-1 霞ヶ浦

#### (1) 地勢

本論では、国土交通省の定義に従い、「霞ヶ浦」を西浦、北浦、外浪逆浦の 3 つの湖面と、それをつなぐ河川（北利根川・鰯川・常陸利根川）から構成される水域全体とする（図 1）。霞ヶ浦は、関東平野の東部（36° N、140° E、平均標高 4m）に位置し、湖面の面積 220km<sup>2</sup>、平均水深約 4m、最大水深約 7m の淡水湖である。霞ヶ浦は利根川と下流で合流し、常陸川水門を経て太平洋につながっている。

#### (2) 霞ヶ浦開発事業

霞ヶ浦の治水と利水を目的とした霞ヶ浦開発事業は、1968 年（昭和 43 年）に建設省（現：国土交通省）によって着工され、1971 年（昭和 46 年）に水資源開発公団（現：独立行政法人水資源機構、以下、水資源機構とする）が事業を継承した。具体的には、湖岸堤の設置や常陸川水門の改築などが行われ、1995 年（平成 7 年）に事業は完了した。翌 1996 年（平成 8 年）4 月より管理運用が開始され（図 2）、4 月から 10 月中旬の間は Y.P.+1.1m、11 月中旬から 2 月末の間は Y.P.+1.3m を中心とする水位管理が行われるようになった。この管理を行っていたところ、湖岸の浮葉植生帯と抽水植生帯が減少したため（水資源開発公団霞ヶ浦開発総合管理所 2002）、2000 年（平成 12 年）の秋より通年 Y.P.+1.1m の暫定的な水位運用が実施され、湖岸植生帯の緊急保全対策の工事とモニタリングが行われた。その後、対策地区において植生が保全再生されつつあることを受けて、2005 年（平成 17 年）から水位運用試験とそれに伴うモニタリング調査が実施されるようになった。2005 年（平成 17 年）の試験は、2 月初旬から開始され、降雨による水位上昇を利用して、2 月中

旬にY.P.+1.3mの水位を確保、それ以外の期間はY.P.+1.1mを中心とする運用が実施された。

2006年（平成18年）の試験は、2月初旬から開始され、降雨及び常陸川水門の操作によって2月末にY.P.+1.3mの水位を確保、それ以外の期間はY.P.+1.1mの水位を目標とする運用が実施された。2005年（平成17年）、2006年ともに、モニタリングの結果、地形及び植生等に大きな変化は確認されなかった（国土交通省関東地方整備局霞ヶ浦河川事務所HP）。

2007年（平成19年）の試験は、1月初旬から開始され、降雨及び常陸川水門の操作によって2月末にY.P.+1.3mの水位を確保、それ以外の期間はY.P.+1.1mの水位を目標とする運用が実施された。

参考として、図版の図 1 に 1996 年度（平成 8 年度）から 2006 年度（平成 18 年度）までの霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位を示す。

なお、「Y.P.」は、利根川や霞ヶ浦の水位や周辺地形を測量する際の基準となっており、霞ヶ浦の平均水位はおおよそ Y.P.1.0m (=T.P.0.16m、「T.P.」は東京湾の平均海面)である(関・池田 2003)。



図 1. 霞ヶ浦水系および妙岐の鼻位置図

出典 : wikipedia を一部改変

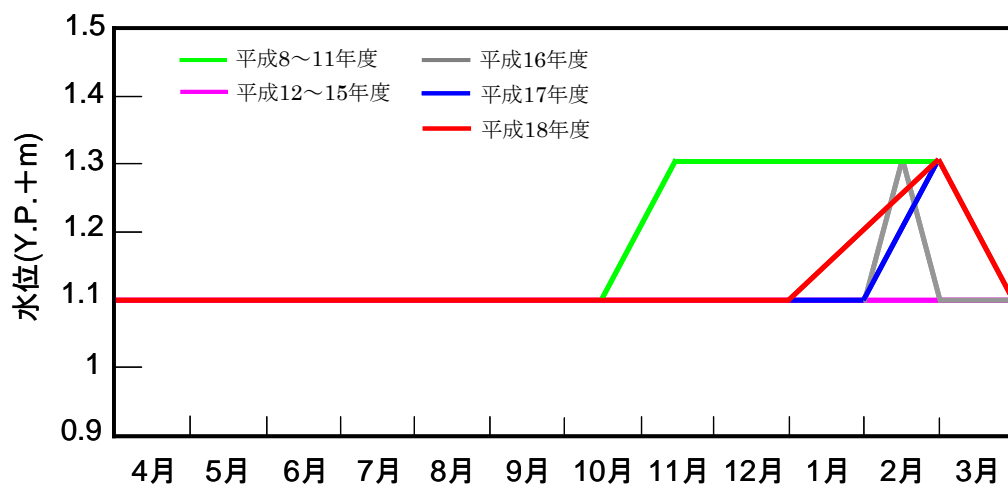


図 2. 平成 8～18 年度の水位運用試験

出典：国土交通省関東地方整備局霞ヶ浦河川事務所 HP 掲載図をもとに筆者作成

#### 1-4-2 妙岐の鼻

##### (1) 地勢

妙岐の鼻は霞ヶ浦（西浦）の南岸、新利根川河口左岸に位置する面積約 52ha の低湿地で、茨城県稲敷市の浮島地区東端にある（図 3）。地表面の標高は北側の湖岸沿いや南東部の船着場を除き、大部分が Y.P.+1.0m～+1.3m である（根岸ら 2002）。妙岐の鼻は「ヤーラ」（野原）もしくは「カヤバ」（萱場）とも呼ばれる。

##### (2) 管理

現在、妙岐の鼻は水資源機構が管理している。妙岐の鼻にある野鳥観察ステージ、野鳥観察小屋、遊歩道、水辺デッキ、木道といった自然を観察する施設は水資源機構によって整備されたものである。

##### (3) 植物

妙岐の鼻にはヨシ、カモノハシ、カサスゲ *Carex dispalata* Boott を主体とする霞ヶ浦最大の湿地植物群落が分布し（根岸ら 2002）、279 種に及ぶ維管束植物が確認されている（路川・前田 1994）。その中には希少種、絶滅危惧種が数多く含まれる。

北側の湖岸沿いは、標高 Y.P.+1.3m～+2.0m の小山が連続している箇所であるが、ここ

には乾燥地に見られるオギ群落やヨシ・セイタカアワダチソウ群落等が分布している。また、水際にはヨシ以外の種がほとんど生育していないヨシ先駆植物群落が分布している。しかし、大部分はカモノハシとヨシが混生するカモノハシ・ヨシ群落およびカサスゲとヨシが混生するカサスゲ・ヨシ群落である（根岸ら 2002）。

「萱」と呼ばれるカモノハシはイネ科カモノハシ属の多年草で、本州から九州の湿地、砂浜などに生育する。高さは 30～70cm である（佐竹ら 1982）。カモノハシは秋田県や栃木県などの地方版レッドデータブックに記載が見られ、地域的に絶滅が危惧されている（表 1）。茨城県のレッドデータブックには記載されていないが、河川水辺の国勢調査における霞ヶ浦での重点調査地 13 箇所の中で、カモノハシが確認されたのは妙岐の鼻のみであった（リバーフロント整備センター 2002）。

表 1. 地方版レッドデータブックにおけるカモノハシのカテゴリーと生存への脅威

県	カテゴリー	生存への脅威
秋田	準絶滅危惧種	
栃木	絶滅危惧Ⅰ類	湿地の開発。自然遷移。圃場整備
新潟	絶滅危惧Ⅱ類	海岸の湿地の開発工事、埋め立て、排水、廃棄物投棄、水質汚濁
富山	危急種	
愛知	絶滅危惧Ⅱ類	
滋賀	希少種	
京都	絶滅寸前種	海浜の開発。海の家・駐車場など観光施設の設置
大分	絶滅危惧Ⅱ類	海岸の開発、改修。湿地の埋立て。植生遷移による環境変化
鹿児島	分布特性上重要	

※ 空白は文献で確認できなかったことによる

#### (4) 鳥類

妙岐の鼻には日本では個体数が少なく繁殖分布も限られているオオセッカ *Megalurus priyeri* やコジュリン *Emberiza yessoensis* のほか（環境省のレッドデータブックで、それぞれ絶滅危惧ⅠB類と絶滅危惧Ⅱ類に指定）、霞ヶ浦の湖岸でよく見られるオオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus* やコヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps* が繁殖している。これら 4 種は霞ヶ浦開発事業の環境モニタリング調査において、霞ヶ浦および妙岐の鼻の自然環境を特徴づける種とされている（根岸ら 2002）。

#### (5) 採草と野焼き

妙岐の鼻では、昔から採草が行われている。採草を行っているのは、浮島地区（旧浮島村）の住民であり、カモノハシやヨシがその対象である。刈り残しを燃やす野焼きは 2005 年（平成 17 年）まで実施されていた。野焼きは「ヤーラモシ」（野原燃し）と呼ばれる。

#### 1-4-3 浮島地区

かつて浮島地区はその名の通り霞ヶ浦に浮かぶ島であったが、昭和初期から中期にかけて行われた干拓によって陸続きになった（図 3）。浮島地区を最古の文献である常陸風土記（8 世紀初頭に編纂）に見ると、「乗浜の里の東に浮島の村あり。四面絶海なり。山野交錯はり、戸十五烟、里七八町餘あり。居める百姓、塩を焼きて業と為す。而して九つの社有り、言も行も謹み諱めり。」とあり、当時の島の姿、島民の生活の様が記されている（人見出版年不明）。

1889 年（明治 22 年）、市町村制の施行とともに浮島地区は稲敷郡浮島村となった。その後、1955 年（昭和 30 年）に隣接する古渡村と合併して桜川村となり、翌 1956 年（昭和 31 年）に阿波村を編入した。さらに、2005 年（平成 17 年）、桜川村は江戸崎町、新利根町、東町と合併し、稲敷市が発足した。

現在、浮島地区には西の洲、西戸崎、東戸崎、前浦、仲郷、柳縄第一、柳縄第二、原口、前原、小舟戸、東前原、尾島、和田、神落の 14 行政区（集落、部落ともいわれる）がある。各行政区はそれぞれ 10 戸～60 戸から構成される。旧浮島村の役場が置かれていた仲郷には、小学校、郵便局、駐在所、農業協同組合などの結節機関が集中している。なお、2006 年までそれぞれの行政区から区長が選出されていたが、2007 年（平成 19 年）からそれが廃止され、西の洲、西戸崎、東戸崎、前浦から 1 人、仲郷、柳縄第一、柳縄第二、和田から 1 人、原口、前原、小舟戸、東前原、尾島、神落から 1 人選出されるようになった。

2006 年（平成 18 年）の浮島地区の人口は 1987 人、世帯数は 563 戸となっている（表 1）。2000 年（平成 12 年）時の総農家数は 237 戸、このうち販売農家が 217 戸である。販売農家の内訳は専業農家 33 戸、第一種兼業農家 63 戸、第二種兼業農家 121 戸である。農業の

中心作物は水稻であり、水田が全経営耕地の 9 割以上を占める（農林水産省大臣官房統計情報部 2002）。



図 3. 浮島地区および妙岐の鼻位置図

出典：国土地理院 1/25,000 地形図「麻生」1991 年（平成 3 年）を一部改変

表 2. 浮島地区の世帯数と人口

西暦	年度	世帯数 (単位:戸)	人口(単位:人)		
			男	女	計
1758	天明 5	221	595	530	1,125
1872	明治 5	225	757	568	1,325
1877	10	225	NA	NA	1,196
1881	14	226	616	624	1,240
1887	20	233	628	600	1,228
1922	大正 11	280	808	838	1,646
1923	12	280	836	852	1,688
1939	昭和 14	325	944	958	1,902
1941	16	329	1,051	1,061	2,112
1942	17	343	1,060	1,068	2,128
1943	18	350	1,074	1,060	2,134
1944	19	381	904	1,104	2,008
1945	20	393	1,020	1,167	2,187
1946	21	398	1,072	1,162	2,234
1947	22	457	1,127	1,211	2,338
1948	23	NA	1,121	1,237	2,358
1949	24	430	1,171	1,271	2,442
1950	25	445	1,184	1,277	2,461
1955	30	447	NA	NA	2,444
1956	31	436	NA	NA	2,475
1957	32	436	NA	NA	2,444
1958	33	440	NA	NA	2,440
1959	34	464	NA	NA	2,471
1960	35	395	NA	NA	2,421
1961	36	458	1,086	1,257	2,343
1988	63	543	1,135	1,164	2,299
1989	平成 元	544	1,137	1,161	2,298
1990	2	541	1,124	1,167	2,291
1991	3	543	1,106	1,155	2,261
1992	4	540	1,104	1,151	2,255
1993	5	541	1,098	1,139	2,237
1994	6	542	1,093	1,127	2,220
1995	7	543	1,075	1,117	2,192
1996	8	541	1,061	1,100	2,161
1997	9	547	1,051	1,094	2,145
1998	10	548	1,046	1,081	2,127
1999	11	548	1,018	1,073	2,091
2000	12	549	1,019	1,051	2,070
2001	13	548	1,003	1,045	2,048
2002	14	556	997	1,035	2,032
2003	15	557	990	1,031	2,021
2004	16	558	986	1,033	2,019
2005	17	561	982	1,015	1,997
2006	18	563	982	1,002	1,984

出典：浜田（1965）と稲敷市役所提供資料をもとに筆者作成

## 1-5 調査方法

2006 年（平成 18 年）10 月 16 日から 2007 年（平成 19 年）12 月 18 日の間に、表 3 に示した 24 人の浮島住民と表 4 に示した 6 人の関係者に対して聞き取り調査を行った。浮島住民へは、妙岐の鼻の利用形態、「ヤーラモシ」に対する考え、過去の妙岐の鼻の自然環境の様子とその変遷などを聞き取った。表 3 中の「萱師」とは萱の商売人を意味する。「浮島財産区管理委員」については後述する。関係者へは、妙岐の鼻との関わりや「ヤーラモシ」に対する考えなどを聞き取った。聞き取り調査は比較的自由的な会話を基盤とした対面調査とした。より詳細かつ正確な情報を把握するために、必要に応じて過去の写真や地形図などを提示し、さらに同じテーマについて複数人から話を聞いた。2006 年（平成 18 年）12 月から 2007 年（平成 19 年）2 月にかけての計 5 日間と 2007 年（平成 19 年）12 月の 2 日間は萱刈りの参与観察および聞き取り調査を行った。なお、記録は基本的に筆記によって行い、承諾が取れた場合は録音も行った。録音した内容は文章に起こし、一部は論文中に引用している。

また、水資源機構利根川下流総合管理所と稲敷市役所に対しては、機関調査を行った。

このような実地調査と平行して、文献調査も行った。その主な対象は、妙岐の鼻における歴史的な記録とした。用いた資料は『桜川村郷土史資料 第壱集』（秋本 1965）、『桜川村郷土史資料 第貳集』（浜田 1965）、『浮島の習俗』（浜田 1970）、『ちょうちん酒』（人見 1974）、『常陸風土記入門』（人見 出版年不明）、『桜川村史考 第一号～第九号』（桜川村史編さん委員会 1979, 1980, 1982, 1983, 1984, 1986, 1987, 1989, 1993）、『桜川村史考 別冊』（桜川村史編さん委員会 1984）、『うきしま風土記』（人見 1999）、『広報 さくら川』（桜川村役場）などである。なお、文献調査は聞き取り調査で得られた内容の裏づけも兼ねている。

表 3. 聞き取り対象者（浮島住民）

イニシャル	年齢	性別	役職など
T.T.	75	男性	現浮島財産区管理委員
H.T.		男性	現浮島財産区管理委員
M.T.(1)		男性	現浮島財産区管理委員
T.H.	80	男性	元浮島財産区管理委員
M.H.	76	男性	元浮島財産区管理委員
M.Y.	65	男性	萱師
M.M.(1)	56	男性	萱師
N.T.	75	男性	萱葺き職人
N.G.	77	男性	元萱師
O.N.	69	男性	
T.Y.(1)	53	男性	
Y.G.	93	男性	
M.M.(2)	90	女性	
Y.M.		男性	
M.K.		男性	
T.M	84	女性	
O.S.	81	男性	
T.Y.(2)	81	男性	
M.T.(2)	78	男性	
H.H.	75	男性	
M.S.(1)	75	男性	
K.H.		男性	
H.A.	60	男性	稲敷市文化財保護指導員
M.S.(2)		男性	

※ 年齢の空白は確認しなかったことによる

表 4. 聞き取り対象者（関係者）

イニシャル	役職など
I.N.	水資源機構利根川下流総合管理所元環境課長
M.T.	水資源機構利根川下流総合管理所現環境課長
K.N.	土浦市・かすみがうら市文化財保護審議会委員
I.M.	稲敷市役所管財課元職員
N.H.	国立環境研究所主任研究員
N.J.	東京大学農学部助教
A.H.	日本野鳥の会茨城県支部会員

## 第2章 妙岐の鼻の歴史

### 2-1 はじめに

本章では、妙岐の鼻で行われてきた人間の営みについて論じる。具体的には、これまで浮島地区の人々が妙岐の鼻をどのように利用し、どのような意味を持つ空間として認識していたかの二点を中心として話を進める。

### 2-2 干拓と堤防建設による萱場の減少

現在の妙岐の鼻の面積は約 52ha とされている（路川ら 1992；路川・前田 1994；根岸ら 2002）が、かつては、より広い面積を有していた。それは過去の航空写真や地形図などから確認することができる。例えば、1906 年（明治 39 年）の地形図（図 4）を見てみると、萱が生育していると思われる荒地の面積が現在よりも広いことが分かる。また、現在よりも先端が細長い地形をしている。これは図 3 と比較するとよく分かる。

地形の変化については浜田（1965）がその詳細を記している。浜田（1965）によると、萱場はもともと 51 町 1 段 6 畝余歩（約 50.7ha）と番外地約 6 町歩（約 6ha）から成り、その合計は約 57 町 1 段 6 畝余歩（約 56.7ha）であったという。しかし、昭和初期から中期にかけて行われた干拓や堤防の建設によって、萱場の面積は徐々に減少していった。

最初の干拓は昭和 2 年（1927 年）に起工した「甘田入干拓」である（図 7）。この干拓は野田奈川（桜川）の南西部にある入り江を対象として行われ、昭和 23 年（1948 年）に竣工した。干拓面積は 135ha である（茨城大学農学部霞ヶ浦研究会 1977）。

続いて行われたのが、1932 年（昭和 7 年）に起工し、浮島地区の西南部を流れていた野田菜川を対象とした「野田菜川干拓」である（図 7）。この干拓を推進したのが関谷友吉であったことから、野田菜川干拓は「関谷干拓」とも呼ばれる。野田菜川干拓は 1952 年（昭和 27 年）に竣工し、170ha が干拓された（茨城大学農学部霞ヶ浦研究会 1977）。なお、野田菜川干拓施工の際、萱場（番外地を除く）から 1 町 1 反歩（約 1.1ha）が売渡された（浜田 1965）。図 5 では、野田菜川干拓が行われている様子が確認できる。

1947 年（昭和 22 年）には「本新島干拓」が起工した（図 7）。この干拓は新利根川に河口にかつてあった蓑和田浦と呼ばれる入り江を対象として行われた。干拓面積は霞ヶ浦で行われた干拓の中で最大規模の 575ha である。竣工年は 1963 年（昭和 38 年）である（茨城大学農学部霞ヶ浦研究会 1977）。1952 年（昭和 27 年）の地形図（図 6）では、本新島干拓が行われている様子が確認できる。

1949 年（昭和 24 年）には、二号堤敷地（図 7）として萱場（番外地を除く）2 町 4 反歩余（約 2.4ha）が買収された（浜田 1965）。

1954 年（昭和 29 年）には「神落干拓」が行われた（図 7）。これは国営新利根川農業水利事業によって施工された二号堤の締め切りによって残された野田菜川河口の公有水面（霞ヶ浦の一部）14 町 3 反 6 畝（約 14.3ha）と、萱場（番外地を除く）6 町 1 反 6 畝（約 6.1ha）を対象とした干拓事業である（「新利根川土地改良区 50 年史」編集委員会 2003）。図 7 では神落干拓が終了している様子が確認できる。なお、浜田（1965）は干拓対象地を公有水面 14 町 2 反 6 畝と、萱場（番外地を除く）6 町 1 反 8 畝と記しており、数値が若干異なっている。

最後に着工されたのが「西の州干拓」である（図 7）。西の州干拓は甘田入干拓と野田菜川干拓によって出来上がった入り江を対象として行われ、昭和 37 年（1962 年）に起工、昭和 41 年（1966 年）に竣工した。干拓面積は 165ha である（茨城大学農学部霞ヶ浦研究会 1977）。西の州干拓によって、島の南側一帯が陸続きとなり、島としての姿はすっかりなくなった。

繰り返される干拓や堤防の建設により、萱場（番外地を除く）の面積は合計 9 町 6 段 8 畝歩（約 9.6ha）減少し、41 町 4 反 8 畝歩（約 41.1ha）となった（浜田 1965）。浜田（1965）は番外地について記していないが、M.S.(1)氏によると、番外地の一部を本新島干拓の用地として利用したとのことなので<sup>1</sup>、その面積は 6 町歩（約 6ha）より減少したと思われる。また、このことで妙岐の鼻の先端の地形の変化が説明できる。なお、本節の冒頭で妙岐の鼻の面積を約 52ha と述べたが、浜田（1965）に従うと、その面積は最大 47.1ha にしかな

---

<sup>1</sup> 2007 年 11 月 10 日の M.S.(1)氏への聞き取りによる。

らない（番外地の面積が変化しなかった場合）。この差は当時と現在で、妙岐の鼻と呼ばれる場所が異なっていることが原因であると思われる。

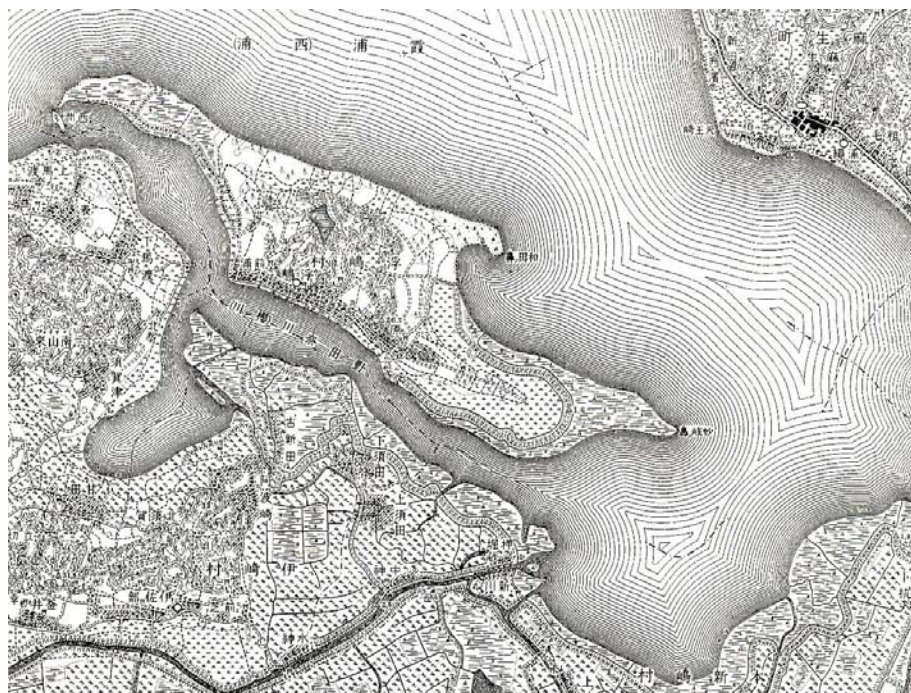


図 4. 1906 年（明治 39 年）の浮島地区

出典：国土地理院 1/50,000 地形図「佐原」1906 年（明治 39 年）



図 5. 1934 年（昭和 9 年）の浮島地区

出典：国土地理院 1/50,000 地形図「佐原」1934 年（昭和 9 年）



図 6. 1952 年（昭和 27 年）の浮島地区

出典：国土地理院 1/25,000 地形図「麻生」1952 年（昭和 27 年）



図 7. 1968 年（昭和 43 年）の浮島地区

出典：国土地理院 1/25,000 地形図「麻生」1968 年（昭和 43 年）を一部改変

### 2-3 妙岐の鼻の所有権の変遷

現在、妙岐の鼻の所有権は水資源機構におかれているが、かつて妙岐の鼻は浮島村の村有地であった。村有地になった年代は定かでないが、浜田（1965）は明治時代（1868 年～1912 年）以降であると推測している。

その後、1953 年（昭和 28 年）に町村合併促進法が公布され、1955 年（昭和 30 年）に浮島村は隣村の古渡村と合併した。その際、地方自治法（昭和 22 年法律第 67 号）第 294 条第 1 項に基づき、妙岐の鼻は浮島財産区の財産となった。

そして、1987 年（昭和 62 年）、妙岐の鼻は水資源開発公団によって買収され、現在に至る。

### 2-3-1 浮島財産区

財産区は、地方自治法第 294 条第 1 項で次のように定義されている。

「法律又はこれに基く政令に特別の定があるものを除く外、市町村及び特別区の一部で財産を有し若しくは公の施設を設けているもの又は市町村及び特別区の廃置分合若しくは境界変更の場合におけるこの法律若しくはこれに基く政令の定める財産処分に關する協議に基き市町村及び特別区の一部が財産を有し若しくは公の施設を設けるものとなるもの（これらを財産区という。）があるときは、その財産又は公の施設の管理及び処分又は廃止については、この法律中地方公共団体の財産又は公の施設の管理及び処分又は廃止に關する規定による。」

財産区を形式的に理解すると、それは地方公共団体の一種であるため、その構成員は当該財産区に属する住民すべてということになる（鈴木 2007）。つまり、浮島財産区の構成員は旧浮島村の全住民を意味する。合併の際、浮島財産区の財産となったのは、字尾嶋 6276 番（枝番不明）、字尾嶋 6498 番（枝番不明）、勝木 5020 番（枝番不明）である<sup>2</sup>。字尾嶋 6276 番と字尾嶋 6498 番が萱場に当たる（図 8）。

地方自治法第 296 条の 2 に基づき、浮島財産区には浮島財産区管理会が置かれている（稲敷市 HP）。浮島財産区管理会は会長 1 人を含む 7 人の財産区管理委員によって組織される。財産区管理委員は、浮島財産区の区域内に 3 箇月以上住所を有する者（世帯主）で、稲敷市の議会議員の被選挙権を有する者の中から選任される。選任は市長によって行われ、その際、市議会の同意を必要とする。財産区管理委員の任期は 4 年である。なお、現在、浮島財産区の事務は稲敷市役所総務部管財課の職員が行っている<sup>3</sup>。

2005 年（平成 17 年）時における浮島財産区の財産を表 5 に示す（稲敷市 HP）。かつて萱場であった尾嶋 6276-4 番は現在、浮島地区農業集落排水処理施設などの用地として一部

---

<sup>2</sup> 稲敷市役所提供資料による。

<sup>3</sup> 2007 年 2 月 8 日の I.M.氏への聞き取りによる。

利用されている。

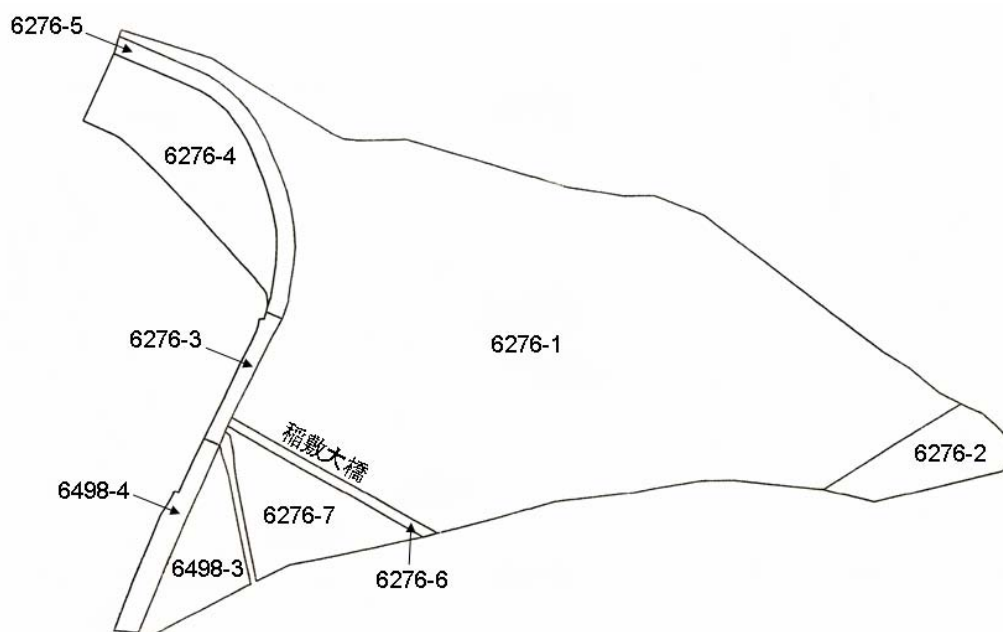


図 8. 妙岐の鼻とその周辺の地番

出典：市役所提供資料をもとに筆者作成

表 5. 現在の浮島財産区の財産（稲敷市 HP）

大字	字	地番	地目	地積(m <sup>2</sup> )
浮島	尾嶋	6276-4	原野	46,609
"	勝木	5020-1	"	92,073
"	"	5020-6	"	125
"	"	5020-7	"	274
"	"	5020-13	"	178

### 2-3-2 水資源機構による妙岐の鼻の買収

霞ヶ浦開発事業の一環である霞ヶ浦の水位上昇によって、妙岐の鼻が水没する恐れが出てきたため、桜川村、議会、浮島財産区管理会は 1978 年（昭和 53 年）から小堤の建設を陳情していた。しかし、1981 年（昭和 56 年）に建設省（現：国土交通省）が、堤外地に

ある土地を全て買収するという方針を打ち出したため、水資源開発公団は浮島財産区に対して萱場の売渡しを要請するようになった。途中、ゴルフ場用地として買収したいという業者も現れたりしたが、最終的には水資源開発公団へ売却することに決定した。1987年（昭和62年）のことだった。売却の大きな理由は、①霞ヶ浦開発事業に協力する、②浮島財産区民の福祉向上を図り、併せて村財政に貢献する、③売却後も萱の利用ができる、の3つであった（桜川村役場 1987）。

買収には、萱葺き屋根の家に住む人々が特に反対の姿勢であった<sup>4</sup>。しかし、買収後も継続して萱が採取できる、補償金が出る、などの理由から、最終的にその人たちも買収を認めることとなった<sup>5</sup>。買収の対象地は、浮島財産区の財産である浮島字尾嶋 6276-1（原野）、同 6276-7（原野）、同 6498-3（原野）の計 498,817m<sup>2</sup>と、地区外者 7 名（7 人の素性は不明）が所有する浮島字尾嶋 6276-2（原野）の 21,457 m<sup>2</sup>で、合計すると 520,274m<sup>2</sup>となる（水資源協会 1996）。地区外者に支払われた金額は不明であるが、浮島財産区の財産であった土地は 10 億 6000 万円（採草権の放棄料等 2 億 200 万円を含む）で処分された（桜川村役場 1987）。

表 6. 水資源機構により買収された土地（水資源協会 1996）

地番	現況		所有者
	地目	地積(m <sup>2</sup> )	
6276-1	原野	445,466	浮島財産区管理者 村長 村野源治
6276-7	原野	30,952	
6498-3	原野	22,399	
計		498,817	
6276-2	原野	21,457	地区外者7名 持分7分の1共有地
合計		520,274	

<sup>4</sup> 2007 年 12 月 18 日の M.H.氏への聞き取りによる。その当時、浮島地区には萱葺き屋根の家が 20～30 件あったという。

<sup>5</sup> 2007 年 8 月 21 日の H.H.氏への聞き取りと 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

### 2-3-3 買収に伴う浮島住民への補償

10 億 6000 万円のうち 6 割が浮島財産区、4 割が桜川村に当てられた<sup>6</sup>。浮島財産区に入った約 6 億円から、入会権（採草権）の放棄料として、当時、萱場の入会権（採草権）を持っていた 202 戸に対して、それぞれ 100 万円が支払われた（桜川村役場 1987）。また、残りは浮島地区全戸の下水整備、集落センター（公民館）の建設や修理などに利用された<sup>7</sup>。このような公共利用がなされた理由は、地方自治法第 296 条の 5 に「財産区は、その財産又は公の施設の管理及び処分又は廃止については、その住民の福祉を増進するとともに、財産区のある市町村又は特別区の一体性をそこなわないように努めなければならない」と書かれているためである。

## 2-4 萱の利用形態

### 2-4-1 自家消費的な萱の利用

妙岐の鼻が水資源開発公団に買収される 1987 年（昭和 62 年）まで、妙岐の鼻は入会地的に利用されていた。入会権（採草権）を持っていたのは、浮島地区の 225 戸の旧家であった（浜田 1965）。この権利は、長子相続で本家に継承された（桜川村史編さん委員会 1986）。しかし、1912 年（明治 45 年、大正元年）には例外的に、浮島地区にある 14 戸の分家・新宅に番外地を貸し付けている（浜田 1965）。なお、前述したが、1987 年（昭和 62 年）の時点で、入会権（採草権）を持っていた家は 202 戸であった（桜川村役場 1987）。権利を持つ家が減少している理由は、おそらく廃家もしくは権利放棄のためだと思われる。

権利を有していた家々は五人組（ゴケンドウ＝五軒堂、クミアイ＝組合、ハン＝班とも呼ばれる<sup>8</sup>）を利用して萱の刈り取りを行っていた（浜田 1965）。五人組は基本的に近隣の 5 戸で構成される<sup>9</sup>。五人組の中から廃家などが出た場合は、その親族や五人組で処分してきたが、1945 年頃（昭和 20 年頃）からは、それを役場丁場（丁場とは区画のようなもの）

---

<sup>6</sup> 2007 年 8 月 21 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>7</sup> 2007 年 8 月 19 日 T.T.氏への聞き取りによる。

<sup>8</sup> 2007 年 12 月 3 日の T.H.氏への聞き取りによる。

<sup>9</sup> 2007 年 12 月 3 日の T.H.氏への聞き取りによる。

として取り扱い、その家が再興した時に元に戻すということになった（浜田 1965）。また、権利を保持するためには、税金として役場へ毎年 1000 円を納める必要があり、これが 1987 年（昭和 62 年）まで続けられた<sup>10</sup>。なお、権利を持たない家の人たちは、本家などの親しい家から権利を借りて萱を刈り取り、それを屋根に利用していた<sup>11</sup>。

51 町 1 段 6 畝余歩（約 50.7ha）の萱場（番外地を除く）は、1 番から 45 番までの丁場に分割され、1 丁場を五人組で使用していた（浜田 1965）。各丁場の頂点には、数字が書かれた石が打ち込まれており、目印の役割を果たしていた<sup>12</sup>。丁場によって萱の量や質が異なるため<sup>13</sup>、3 年毎に抽選を行い、各組の丁場を決め直した（浜田 1965）。抽選は 9 月頃に行われた<sup>14</sup>。さらに五人組の中でも抽選を行い、それぞれの家の刈り場所を決めていた（浜田 1965）。丁場の中の区分けは「萱場分け」と呼ばれていた<sup>15</sup>。「萱場分け」は、各家からの代表者全員で自分達の丁場へ行き、足で萱を倒しながら丁場を 5 つに区切り、各区画の頂点に目印として竹を刺す、という形で行われていた<sup>16</sup>。これらのことから、萱が公平に配分されていたことが伺える。すべての丁場に、ある程度の萱が生育していたと思われるので、当時の妙岐の鼻の面積約 57 町 1 段 6 畝余歩（約 56.7ha）から計算すると、萱がなかった土地は全体の 1 割程度ということになる。また、前述したが、干拓や堤防の建設により萱場が減少してきたため、番外地から約 4 町歩余を補って 46 番と 47 番を設けたとも浜田（1965）は記している。

1948 年（昭和 23 年）3 月 27 日に撮影された航空写真（図 9）を見てみると、刈り取りの跡が確認できる。おそらく黒い部分は萱が刈り取られて地面が露出しているところで、白い部分は植生が残存しているところである。また、黒い部分の中に点在する小さな白い物体は刈り取られた萱の集積場であると思われる。この写真からも、ほぼ全域が刈り取りの対象となっていたことが推測される。

---

<sup>10</sup> 2007 年 12 月 18 日の M.H.氏への聞き取りによる。

<sup>11</sup> 2007 年 12 月 3 日の T.H.氏への聞き取りによる。

<sup>12</sup> 2007 年 11 月 10 日の T.T.氏への聞き取りによる。

<sup>13</sup> 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>14</sup> 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>15</sup> 2007 年 11 月 22 日の O.S.氏への聞き取りによる。

<sup>16</sup> 2007 年 11 月 22 日の O.S.氏への聞き取りによる。

浮島住民によって描かれた図 11 と図 12 から当時の刈り取りの様子が伺える。まず図 11 を見てほしい。M.M.(1)氏から提供して頂いたこの図は、萱師であった M.M.(1)氏の父親が保管していたものである。図の下に「小貫典助」と書かれているが、この図を彼が書いたかは不明である。左側にある黒線はおそらく二号堤を意味し、後から書き加えられたものであると思われる。二号堤が建設され始めたのは 1949 年（昭和 24 年）であるため、黒線を除く図はそれ以前に作成された可能性が高い。浜田（1965）は萱場の減少に伴い、新たに 46 番と 47 番が加わったとしているが、図 11 からは、二号堤建設以前から 46 番が存在していたことが伺える。この点に関しては、本研究ではどちらが正しいのかを明らかにすることはできなかった。なお、現在の妙岐の鼻の姿は、黒線の右側とほぼ一致する。

黒線の左側にある 1 番から 9 番の一部までについて、元萱師である N.G.氏は次のように語っている<sup>17</sup>。

「干拓をつくったときに、これはこれ提供しちゃったから。これ 1 番から 9 番まで。関谷干拓を作るのには、1 番丁場が提供したの。……んで 2 番から 9 番まではこんだあの神落を作るときに提供した。……神落部落をつくるときに、これは宅地に提供した。……10 番からこんだある。あ、9 番からだった。8 番までが提供したんだな。……神落ができるのに。8 番までが提供した。8 番まで。……8 番までは神落にな、2 番から 8 番までは神落のために提供したから。」

関谷干拓（野田菜干拓）では 1 番が、神落干拓では 2 番から 8 番までが提供されたという話である。そして、神落干拓については 8 番までか 9 番までかで悩んでいる様子が伺える。記憶が曖昧であった理由は、図 11 を見ると理解できる。黒い線は 8 番と 9 番にかかるようにして引かれている。

妙岐の鼻の先端の方には番号が振られていない場所が存在する（図 11）。おそらくここが番外地に当たる。N.G.氏は「先はクサ（萱ではない植物の総称）でダメだった」と語って

---

<sup>17</sup> 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

おり<sup>18</sup>、番外地には萱がなかったと思われる。なお、先端の「クサ」は堆肥として利用されることがあった<sup>19</sup>。

続いて、図 12 を見てほしい。この図も図 11 と同様、M.M.(1)氏から提供して頂いたものである。図 11 と比べ、妙岐の鼻の面積が減少し、さらに所々に修正が加えられていることが見て取れる。1 番～7 番と 44 番が消失したこと、45 番と 46 番が一緒になって孤立していることなどから、この図は二号堤が建設された 1949 年（昭和 24 年）以降に書かれたもので、区割りの改定版であると推測される。おそらく 45 番と 46 番は堤防の内側に入ったのであろう。この図の右側には「明治三〇年五月十四日改〇」と書かれているが、この点に関しては不明である。

図 12 の妙岐の鼻の先端をよく見てみると、30、31、32 という番号が振られていないことに気づく。描き忘れの可能性もあるが、これらの場所に生えていた萱が消失、もしくは少なくなり、新たな番外地となったことも考えられる。なぜなら、番外地と思われる場所と同様、これらの場所にも面積が記されているからである。また、図 9 と図 10 を比べると、先端にあるまだらな部分の広がりを確認することができる。仮に、図 12 で 30、31、32 番と振られるはずの場所が番外地であった場合、図 11 のまだらな部分は番外地全域とほぼ一致する。以上の仮説が正しいとすると、浮島の住民は萱のない場所を積極的に番外地にしていたといえる。しかし、図 10 は 12 月に撮影されたものであるため、萱刈りがまだ完了していない可能性も十分考えられる。そのため、一概にこの判断が正しいとは言い切れないところはある。

妙岐の鼻にある 3 本の水路は浮島住民によって掘られたものである<sup>20</sup>。二号堤とほぼ平行に流れている 1 本の水路は「ミオ」と呼ばれ（図 11、図 12）、萱の運搬に利用されていたという<sup>21</sup>。運搬は舟で行っていたとのことなので<sup>22</sup>、水路の幅は今よりも太かったことが推測される。

---

<sup>18</sup> 2007 年 8 月 21 日の聞き取りによる。

<sup>19</sup> 2007 年 8 月 21 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>20</sup> 2007 年 8 月 24 日の M.M.(2)氏への聞き取りによる。

<sup>21</sup> 2007 年 11 月 26 日の M.M.(1)氏への聞き取りによる。

<sup>22</sup> 2007 年 11 月 26 日の M.M.(1)氏への聞き取りによる。

現在、萱刈りには稲刈り用のバインダーが使われているが、このような機械がまだなかった頃は、鎌で刈り取りが行われていた<sup>23</sup>。また、萱場内での萱の運搬には天秤が利用され、萱場からの萱の運び出しには舟を使うことが多かった<sup>24</sup>。そのため、昔の萱刈りは非常に骨の折れる作業であったという。バインダーは 30 年程前に、萱師によって初めて利用された<sup>25</sup>。なお、1978 年（昭和 53 年）に出された「広報さくら川」（桜川村役場 1978）には、萱刈りを機械で行っている写真が掲載されている。

また、現在、萱場内では耕運機で萱を運搬している。これが始まった時期は定かでないが、昔は耕運機を使うことは許されなかったという<sup>26</sup>。耕運機のタイヤによって萱が潰されてしまうからである。これと関係して、O.S.氏は「昔は刈った跡地も大事にしていた」と語った。

1987 年（昭和 62 年）の水資源機構による買収の際、契約により入会権（採草権）は消滅し<sup>27</sup>、以後、浮島地区に住んでさえいれば、誰でも萱刈りを行えるようになった<sup>28</sup>。しかし、その頃には萱葺き屋根が徐々にトタン屋根や瓦屋根に変わってきており、自分の家のために萱を刈る人はほとんどいなくなっていた。N.G.氏によると、1945 年頃（昭和 20 年頃）からこのような変化が現れ、1970 年頃（昭和 45 年頃）には萱葺きの家がほとんどなくなっていたという<sup>29</sup>。

---

<sup>23</sup> 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>24</sup> 2007 年 8 月 19 日の T.T.氏への聞き取りと 2007 年 8 月 21 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>25</sup> 2007 年 12 月 3 日の M.S.(2)氏への聞き取りによる。

<sup>26</sup> 2007 年 11 月 11 日の O.S.氏への聞き取りによる。

<sup>27</sup> 買収の際、水資源開発公団と市役所の間で交わされた覚書による。

<sup>28</sup> これについては本章 8 節 1 項で詳しく述べる。

<sup>29</sup> 2007 年 7 月 30 日の聞き取りによる。



図 9. 1948 年（昭和 23 年）3 月の妙岐の鼻の採草状況

出典：国土地理院 a



図 10. 1974 年（昭和 49 年）12 月の妙岐の鼻の採草状況

出典：国土交通局 HP

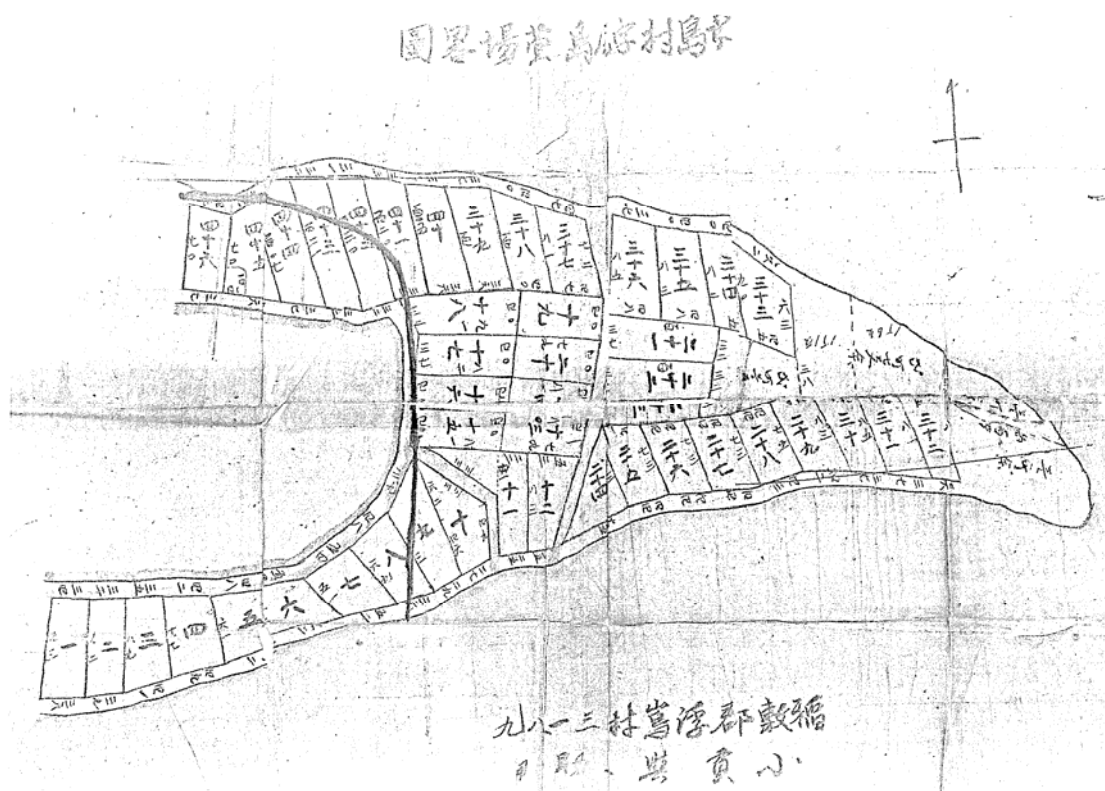


図 11. 荻場の区分け 1

出典：M.M. (1) 氏提供図



図 12. 荻場の区分け 2

出典：M.M. (1) 氏提供図

## 2-4-2 萱師による萱の利用

萱葺き屋根の葺き替えや修復は数年や数十年に一度行えば十分である。そのため、入会権（採草権）を持つ家が萱を必要としない年は、同じ組合（五人組）や兄弟・親戚の家などに、その年の採草権を譲ることがしばしばであった<sup>30</sup>。しかし、そのような需要すらない年は、採草権を 7,000 円から 10,000 円で、萱の商売人である「萱師」に売る家が多かった<sup>31</sup>。もちろん、良質な萱ほど、高い値段で売ることができた<sup>32</sup>。つまり、住民にとって、萱場は現金収入の場でもあったのである。このような住民と萱師とのやり取りは妙岐の鼻が買収される 1987 年（昭和 62 年）まで続けられた<sup>33</sup>。また、萱師に萱を貸し付けておき、必要な年に萱師から萱を返してもらうということもあった<sup>34</sup>。また、時代が進むにつれ、萱師は良質な萱がある場所を選択的に刈り取るようになった。浮島地区には最も多い時で、4 人の萱師がいた<sup>35</sup>。各萱師は毎年 9 月か 10 月頃に、入会権（採草権）を持つ 25～30 戸と契約を結び、刈り取った萱を浮島地区外で売却していた<sup>36</sup>。どの萱師の家も入会権（採草権）を持っていたが、商売をするためには、自分の家の萱だけでは足りないので、このような契約を結んでいたのである。契約に関して、N.G.氏はこう語った<sup>37</sup>。

「大体買う家は決まってるから。大体決まっている家に、（萱師が）4 人いんだから、大体親戚系統とか色んな系統があっぺよ。親戚系統とか友達とか。そういうほれ、懇意あるところか契約するわけだべ。4 人いんだからよ。」

4 人の萱師が契約を結ぶ家は大体決まっているようである。これは契約の重複を防ぐ意味もある<sup>38</sup>。また、萱の売却に関して、N.G.氏は次のように語った<sup>39</sup>。

---

<sup>30</sup> 2007 年 12 月 3 日の T.H.氏への聞き取りによる。

<sup>31</sup> 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>32</sup> 2007 年 12 月 3 日の T.H.氏への聞き取りによる。

<sup>33</sup> 2007 年 12 月 18 日の M.H.氏への聞き取りによる。

<sup>34</sup> 2007 年 11 月 11 日の O.S.氏への聞き取りによる。

<sup>35</sup> 聞き取りにより、1970 年頃には萱師が 4 人いたことが分かっている。

<sup>36</sup> 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>37</sup> 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

<sup>38</sup> 2007 年 7 月 30 日の N.G.氏への聞き取りによる。

「やっぱりよ、他の村へ（萱を）売んのに個人さには売れねえのよ。・・・ほんでヤネヤ（萱葺き職人）を通じて買いに来るわけだ。ヤネヤを通じて。・・・（ヤネヤから）カヤをこんだけあそこの家さ持っていつてくんねえかと頼まれるわけ。そんで持っていくわけだ。・・・歩く萱師はいねえわけだ。みんなヤネヤだ、ヤネヤ。・・・ヤネヤさんには一割とかいくらとか口利き料払うべや。」

さらに、こんな話もあった<sup>40</sup>。

「萱師はみんなヤネヤと付き合ってるから・・・。そのヤネヤはよ、来るところが決まってっから。来る家決まってるから。得意場があつて。」

萱葺き職人は萱師に萱を必要としている家を教える。そして、萱師はその家に萱を届ける。このような萱師と萱葺き職人の情報交換、および経済的取引があったようである。

また、萱師は浮島地区に住む高齢の農家の女性を雇い、契約した家の区画の萱を刈り取らせていたという<sup>41</sup>。これは「チンガリ」もしくは「ヤーラガリ」と呼ばれていた<sup>42</sup>。また、萱を運搬する人は別に頼んでいたという<sup>43</sup>。

萱を刈る場所に関して、N.G.氏はこう語っている<sup>44</sup>。

「（萱が）いいところも悪いところもあったけども、悪いところもやっぱり刈んなきゃ量が足らなかったから。・・・刈って、そいつやっぱり注文とってあつからよ。」

当時、萱の需要が非常に多かったことが伺える語りである。N.G.氏が萱刈りをしていた

---

<sup>39</sup> 2007年7月30日のN.G.氏への聞き取りによる。

<sup>40</sup> 2007年7月30日のN.G.氏への聞き取りによる。

<sup>41</sup> 2007年11月10日のM.M.(1)氏への聞き取りによる。

<sup>42</sup> 2007年11月10日のM.M.(1)氏への聞き取りによる。

<sup>43</sup> 2007年7月30日のN.G.氏への聞き取りによる。

<sup>44</sup> 2007年7月30日のN.G.氏への聞き取りによる。

頃は、ほぼ全域が刈取りの対象だったという<sup>45</sup>。

## 2-5 萱の品質

浮島地区の住民は妙岐の鼻の北側を「ウシロ」、南側を「マエ」と呼んでいる<sup>46</sup>。萱が太くて長い所謂「いい萱」が生えていた場所は「ウシロ」であり、「マエ」の萱は短くて細かった<sup>47</sup>。N.G.氏によると、37番（図11もしくは図12）に最も「いい萱」が生えていたという。この場所に関してN.G.氏はこう語った。

「ここらへんが一番、おれらが昔商売してるときに一番もうかつこんだ（儲かったんだ）。ここのカヤならばよ、どこら持っていっても恥ずかしくねえ。いい萱だから。」

37番の位置に生育する萱は現在でも刈り取られている（図15）。また、「いい萱」が生えている場所として、N.G.氏は33番（図11もしくは図12）も挙げた。しかし、ここは堤防からの距離が離れているため、運搬に苦勞した場所でもあったという<sup>48</sup>。

M.Y.氏によると、萱にはオガヤとメガヤがあるという。オガヤは黄色で、メガヤよりも数が少ない。また、オガヤは硬く、葺きにくいいため、オガヤを持っていくと職人がいい顔をしないという<sup>49</sup>。

## 2-6 屋根葺き

萱葺き職人は「ヤネヤ」と呼ばれた。浮島地区には福島県会津地方から出稼ぎにくる職人が数多くいた。彼らは毎年晩秋から春にかけて仕事をし、帰っていくのが恒例であったが、戦後瓦屋根の家が多くなるにつれ、逐次姿を消していった（桜川村編さん委員会 1986）。

N.T.氏は浮島に残った職人の弟子である（日本ナショナルトラスト 2003）。

---

<sup>45</sup> N.G.氏が萱師をしていたのは1955年～1970年頃（昭和30～45年頃）。

<sup>46</sup> 2007年7月30日のN.G.氏への聞き取りによる。

<sup>47</sup> 2007年7月30日のN.G.氏への聞き取りによる。

<sup>48</sup> 2007年7月30日のN.G.氏への聞き取りによる。

<sup>49</sup> 2007年8月23日のM.Y.氏への聞き取りによる。

萱屋根葺きの仕事は下働きの労力を多く必要としたので、親類を始め、組合の手助けを受けて仕事を進めた。萱屋根の葺き替えは「ヤネブシン」と呼ばれる（桜川村編さん委員会 1986）。

萱屋根葺きに関して、H.A.氏は、「みなさんに迷惑がかかって申し訳なかった」と語った<sup>50</sup>。

## 2-7 萱の減少

調査をしていると、「昔と比べて、萱が取れなくなった」という声をよく耳にする<sup>51</sup>。データがないため、いつごろ、どの場所で、どの程度萱が減ったのかは不明である。しかし、N.G.氏の話によると、1970 年（昭和 45 年）頃は、ほぼ全域を刈り取っていた、とのことなので、萱が減少してきたのは、それ以降であると思われる。

また、平成 8 年と平成 10 年の植生図を比べると（図 13）、妙岐の鼻の東端にあるカモノハシーヨシ群落がかさスゲヨシ群落に変化しており、萱の減少が伺える。

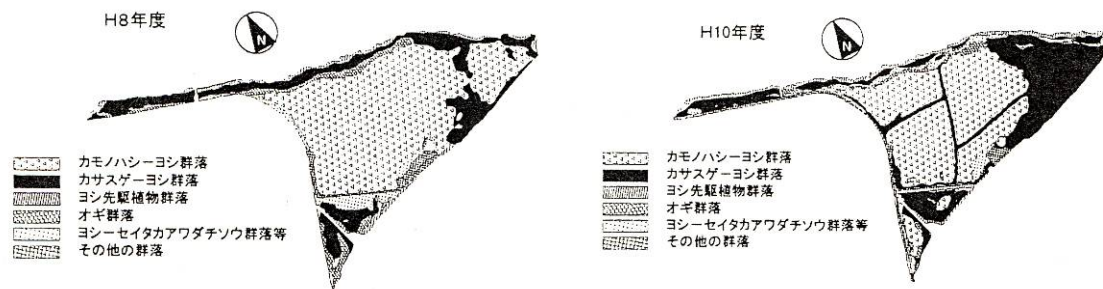


図 13. 妙岐の鼻の植生（根岸ら 2002）

<sup>50</sup> 2007 年 10 月 16 日の聞き取りによる。

<sup>51</sup> 例えば 2007 年 8 月 3 日の T.Y.(1)氏への聞き取りによる。

## 2-8 近年の萱刈り

### 2-8-1 萱刈りに至るまでの過程

現在、萱刈りがどのような過程を経て行われているのかを以下に示す（図 14）。これは稲敷市役所総務部管財課職員の I.M.氏（現：教育委員会学校教育課）から提供して頂いた行政資料がもとになっている。

萱刈りを行うためには、まず稲敷市浮島財産区の管理者である稲敷市長が、水資源機構利根川下流総合管理所長に対して、水資源開発施設等（妙岐の鼻を意味する）の使用許可申請を行う必要がある。申請する使用期間は 3 年間である。2006 年（平成 18 年）に出された使用承認書では、使用の目的を「屋根補修及び農業の資材として使用するために、萱等の採草を行うため」としている。

申請の許可が下りると、毎年 10 月もしくは 11 月に、稲敷市役所総務部管財課の職員が浮島地区の各区長に対して採草希望者の調査を依頼する。区長は回覧板を利用して調査を行い、希望者を取りまとめる。そして、指定された日までに稲敷市桜川総合窓口課へその結果を提出する。

使用承認書別記条件第 1 項には「使用者は、枯草の採草を行なう時は、採草範囲及び立ち入り期間等を事前に届出を行わなければならない」と書かれている。そのため、稲敷市長は 11 月もしくは 12 月に、水資源機構利根川下流総合管理所長に対して届出を提出する。立入りの対象となる場所は、浮島字尾嶋 6276-1、同 6276-7、同 6498-3（図 8）で、その面積の合計は 498,817m<sup>2</sup>である。

届出の提出後、浮島財産区管理委員会の会長は採草開始日を決定し、それを採草希望者に通知する。そして、その日から採草が許可される。なお、採草期間は 2005 年度（平成 17 年度）が 12 月 11 日から 2 月 28 日まで、2006 年度（平成 18 年度）は 12 月 19 日から 2 月 28 日まで、2007 年度（平成 19 年度）が 12 月 3 日から 2 月 29 日であった。

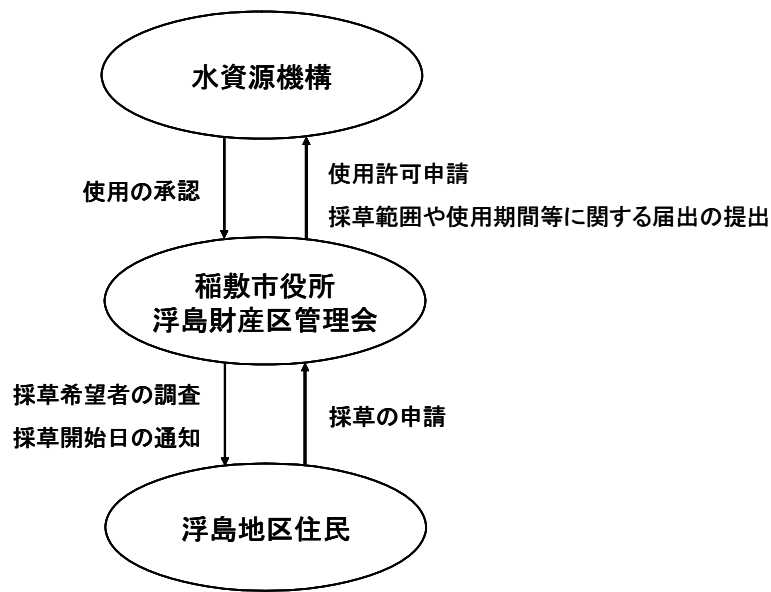


図 14. 萱刈りに至るまでの各アクター間のやり取り

※ 筆者作成

## 2-8-2 萱刈りにおけるルール

現在、萱場には、萱葺き屋根の家に住んでいる人が最も優先的に刈り場所を選ぶことができるというルールがある<sup>52</sup>。つまり、その人は最も良質な萱で自宅の屋根を葺くことができる。このルールができた時期は不明だが、おそらく水資源機構による買収以後であると思われる。なぜなら、買収以前は、本章の 4 節で述べたような萱刈りが行われていたからである。買収が行われた 1987 年（昭和 62 年）の時点では、まだ浮島地区の中に萱葺き民家が残っていたので<sup>53</sup>、その家に住む人々の生活を守るという意味で、このようなルールが設けられたと思われる。

現在、浮島地区にある萱葺き屋根の家は N.G.氏と O.N.氏の二戸だけであり、このルールに従うと、彼らが最も場所を選ぶ権利が強いということになる。

<sup>52</sup> 2007 年 9 月 4 日の N.T 氏への聞き取りと 2007 年 11 月 11 日の O.N.氏への聞き取りによる。

<sup>53</sup> 2007 年 12 月 18 日の M.H.氏への聞き取りによる。

### 2-8-3 2006 年度（平成 18 年度）の萱刈り<sup>54</sup>

2006 年度（平成 18 年）の採草希望者は萱師である M.Y.氏と M.M.(1)氏、萱葺き職人である N.T.氏、萱葺き屋根の家に住む N.G.氏と O.N.氏の 5 人であった。しかし、実際に萱刈りを行ったのは M.Y.氏、M.M.(1)氏、N.T.氏の 3 人だけであった。萱が必要な場合、N.G.氏は N.T.氏から、O.N.氏は M.Y.氏から、萱を提供もしくは販売してもらうという<sup>55</sup>。そのため、前項のルールは、明確には行使されていない。

この年の採草許可日は 12 月 19 日であり、その日から作業が行われた。また、この年から、採草許可日に萱場の区割りというものが行われるようになった。妙岐の鼻が買収された 1987 年（昭和 62 年）以降、採草許可日以降であれば、採草申請者は好きな場所を早い順で刈り取ってよい、ということになっていた。しかし、場所を巡るトラブルが発生したため、この年からこのような処置を取ることもなったのである<sup>56</sup>。区割りは稲敷市管財課職員と浮島財産区管理委員会の会長の主導の下で行われ、話し合いによって各人の刈り場所が決まった。

2006 年度（平成 18 年度）は、妙岐の鼻北部の一部と、南部の一部で萱刈りが行われた（図 15）。①の場所は N.T.氏、M.Y.氏、M.M.氏（男性）の 3 人がほぼ均等に、②の場所は N.T.氏が、③の場所は M.Y.氏が刈り取っていた。②の場所に関して、N.T.氏は次のように語っている<sup>57</sup>。

「(②の場所に) カヤがあんまり悪かったの。ほないど、いったんべーっと刈っちまえば、こんだ新しく出たのが、いいカヤ出たわけよ。だから今、ここ一番でえじ（大事）なのよ。」

いい萱を出すためには、いったん刈り取ってしまうことが効果的であるようだ。N.T.氏に

---

<sup>54</sup> 参与観察による。

<sup>55</sup> 2007 年 11 月 11 日の O.N.氏への聞き取りと 2007 年 9 月 4 日の N.T.氏への聞き取りによる。

<sup>56</sup> T.T.氏の聞き取りによる。

<sup>57</sup> 2007 年 9 月 4 日の N.T.氏への聞き取りによる。

よると、彼が刈り取っている①の場所の西側よりも、新しく刈り始めた②の場所のほうにいい萱が生えているとのことである。

また、③の場所に関して、N.T.氏はこう語った<sup>58</sup>。

「これ（③の場所は）は誰も、おらも行って刈れないわけだ。M.Y.がいったいに刈ってっから。」

いつからかは不明だが、M.Y.氏は③の場所の萱を毎年刈り続けている。このように同じ場所を継続的に刈り続けている人がいると、その場所がその人のものののように扱われ、他者はその場所を刈ることを遠慮するようである。

2006 年度は 1 月から霞ヶ浦の水位が上昇することになっていたにも関わらず（図 2）、その情報がM.Y.氏の耳には届いていなかった<sup>59</sup>。そして、水位上昇に 12 月末の大雨も重なり（図 22）、この年、M.Y.氏は十分な収穫量を得ることができなかった<sup>60</sup>。



図 15. 2006 年度に刈取りが行われた大まかな位置

出典：国土地理院 b を一部改変

<sup>58</sup> 2007 年 9 月 4 日の N.T.氏への聞き取りによる。

<sup>59</sup> 2007 年 8 月 23 日の M.Y.氏への聞き取りによる。

<sup>60</sup> 2007 年 2 月 16 日の M.Y.氏への聞き取りによる。

#### 2-8-4 2007 年度（平成 19 年度）の萱刈り<sup>61</sup>

2007 年度（平成 19 年度）の採草希望者は 2006 年度（平成 18 年度）の希望者 5 人と新たな希望者 1 人の合計 6 人であった。この年については、例年よりも早い 12 月 3 日から萱を刈ることが許可された。これは浮島財産区管理会の会長と水資源機構によって決められた<sup>62</sup>。2007 年度（平成 19 年度）の霞ヶ浦の水位運用試験がどのように行われたかは不明だが、萱刈りへの影響を少なくするために、そのような処置を取った、とのことである<sup>63</sup>。許可日が早められたことに関して、萱師の M.Y.氏から、次のように語っている<sup>64</sup>。

「カヤは一霜、二霜落ちてからのカヤはええつだいな。……（12 月）10 日過ぎると一霜。……ピンク色になってくるんだ、色が。カヤの色が。寒さ入っと。……二回目の霜落ちっと、ちょうど一番ええ時。寒さがへえっとな。霜落ちると。」

続けて M.Y.氏はこうも語った。

「それ（一回目の霜）目安にやってたけど、こんどしょうめえ。水位なほら。」

M.Y.氏は、萱刈りの適期を霜と萱の色で判断している。そして、萱を刈る時期として 12 月 3 日は早すぎるが、水位の影響を考えると致し方ないと考えている。

実際、12 月 3 日に萱刈りを開始した人はいなかった。まだ下草が青く、萱が乾燥しきっていないためである。いくら許可日を早めても、時期がくるまで萱刈りを行うことはしないようである。

---

<sup>61</sup> 参与観察による。

<sup>62</sup> 2007 年 11 月 10 日の T.T.氏への聞き取りによる。

<sup>63</sup> 2007 年 11 月 10 日の T.T.氏への聞き取りによる。

<sup>64</sup> 2007 年 8 月 23 日の M.Y.氏への聞き取りによる。

## 2-8-5 文化材保護という萱の利用

近年、妙岐の鼻の萱は、文化財に指定された建造物の屋根の葺き替えや修復に利用されることが多い。本項では聞き取りによって確認できた限りではあるが<sup>65</sup>、これまで妙岐の鼻の萱が、どのような建造物に利用されてきたのかを示す（表 7）。以下の建造物に萱を供給したのは、萱師もしくは萱葺き職人である。

表 7. 妙岐の鼻の萱が利用された建造物

名称	カテゴリー	所在地
佐久良東雄旧宅	国指定	茨城県石岡市
椎名家住宅	国指定	茨城県かすみがうら市
雪入の郷倉	市指定	茨城県かすみがうら市
旧福田馨家住宅	市指定	茨城県かすみがうら市
旧福田与兵衛家板倉	市指定	茨城県かすみがうら市
間宮林蔵の生家	県指定	茨城県つくばみらい市
観音寺本堂	県指定	茨城県潮来市
富岡家住宅	県指定	茨城県土浦市
高野家住宅	市指定	茨城県土浦市
愛宕神社	市指定	茨城県土浦市
大聖寺	市指定	茨城県土浦市
旧小松家住宅	市指定	茨城県小美玉市
長峰家住宅		茨城県行方市
偕楽園の好文亭		茨城県水戸市
安中小学校の復元竪穴式住居		茨城県美浦村

※ 筆者作成

## 2-9 ヨシの利用

妙岐の鼻ではヨシの利用も見られる。ヨシに関して、元萱師のN.G.氏は次のように語った<sup>66</sup>。

「ヨシはヨシでもってカヤから引っこ抜いちゃって。ヨシはヨシで売んのよ。・・・一緒に刈って・・・。ヨシはやっぱヨシを使う商売人があらわけやね。その人に売るわけやね。・・・車で買いに来てくれっから。ただ積んでやっだけ。何パ把。で一

<sup>65</sup> 2006 年 10 月 22 日の N.T.への聞き取り、2007 年 2 月 5 日の M.Y 氏への聞き取り、2007 年 11 月 6 日の K.N.への聞き取り、2007 年 11 月 10 日の M.M.(1)氏への聞き取りによる。

<sup>66</sup> 2007 年 7 月 30 日の聞き取りによる。

把いくらだからって金もらうだけ。」

萱とヨシは混生しているため、萱とヨシは一緒に刈り取られる。N.G.氏は束からヨシだけを抜き取って、売っていたのである。N.G.氏によると図 11 もしくは図 12 の 33 番当たりにはいいヨシがあったという。先端のほうにヨシが多かったことに関して、2、3 年前までヨシズ用にヨシの刈り取りを行っていたM.M.(2)氏はこう語った<sup>67</sup>。

「浮島はぐーと向こうの妙岐つうところだよ。そこがヨシが一番良かったんだよ。」

妙岐の鼻の先端を「妙岐」と呼び、そのヨシが品質面において優れていたという内容である。「妙岐」にはヨシが多く、その長さは 6 尺か 7 尺位であった<sup>68</sup>。現在でも「妙岐」にはヨシがあるが、色が黒くなり、商品価値はないという<sup>69</sup>。なお、「妙岐」の中には、ほかよりも土地が低い「フカツロ」と呼ばれる場所があった（図 16）<sup>70</sup>。

M.M.(2)氏は 2、3 年前まで、稲敷大橋の下でヨシを 100 把から 150 把（2 トン車 1、2 台）刈り取り、それを埼玉から来る業者に売却していた。現在ヨシ刈りを行っていないのは、ヨシの品質が低下したことが理由である<sup>71</sup>。M.M.(2)氏によると、「ヤーラモシ」を行わないと、ヨシが黒くなり、商品価値がなくなるという<sup>72</sup>。

萱葺き職人のN.T.氏や萱師のM.Y.氏はヨシの刈り取りも行っている<sup>73</sup>。主に屋根材として利用するためであるが、M.Y.氏はヨシを神主に譲ることもしている<sup>74</sup>。ヨシに関して、M.Y.氏は次のような発言をしている<sup>75</sup>。

---

<sup>67</sup> 2007 年 8 月 24 日の聞き取りによる。

<sup>68</sup> 2007 年 8 月 24 日の M.M.(2)氏への聞き取りによる。

<sup>69</sup> 2007 年 8 月 24 日の M.K.氏への聞き取りによる。

<sup>70</sup> 2007 年 8 月 24 日の M.M.(2)氏への聞き取りによる。

<sup>71</sup> 2007 年 8 月 24 日の M.M.氏への聞き取りによる。

<sup>72</sup> 2007 年 8 月 24 日の M.M.氏への聞き取りによる。

<sup>73</sup> 参与観察による。

<sup>74</sup> 2007 年 8 月 23 日の M.Y.氏への聞き取りによる。

<sup>75</sup> 2007 年 8 月 23 日の聞き取りによる。

「(図 15 の③の場所のヨシは) 硬いんだ。・・・今年はカヤ短かったから、そういう時(ヨシ) がいいんだよ。・・・そんで、苛められてっからあそこ(③の場所) はな、カヤで苛められてっから硬いヨシができた。・・・カヤの間にはさまってるべよ。」

萱が短い年のヨシや、萱に挟まれるように生育しているヨシは、硬く、品質が良いらしい。



図 16. 「フカツロ」の大まかな位置

出典：国土地理院bを一部改変

## 2-10 「ヤーラモシ」

「ヤーラモシ」について元萱師であるN.G.氏は次のように語っている<sup>76</sup>。

「それ(去年の萱)と一緒に屋根葺いたら弱い、やっぱ弱い。新しいカヤでもって葺かねえと弱い。去年のカヤは雨風には、さらされちゃってっから、あくが抜けちゃってっから、そいつが混じっちゃうからは、新しいカヤと。2年分混じっちゃうから。そうずっとカヤが弱い。屋根が弱い。・・・燃しちゃえば新しいカヤだけになるから。」

<sup>76</sup> 2007年7月30日の聞き取りによる。

また、2 年程前まで、ヨシズ用にヨシの刈り取りを行っていたM.M.(2)氏は「ヤーラモシ」についてこう語った<sup>77</sup>。

「毎年ほら、ヤーラにほら、3 月になつと燃すでしょうよ。こんだ燃さなくなっちゃったから、なおさらダメなんだよ。ヨシも刈れないの、だから。ヨシもやっぱりいいヨシでなくなっちゃう。・・・ヨシが黒くては売れないから。燃さないと炭たかっちゃうの。炭。まっくれえ炭がたかっちゃって。」

この 2 人の発言より、「ヤーラモシ」は妙岐の鼻に生育する萱やヨシの量や質を維持するために行われていたことが分かる。そのため、浮島地区に萱葺屋根の家が多かった頃、「ヤーラモシ」は住民の生活を支えるという意味合いが強かったといえる。また、刈り取らないものや、刈っても搬入しないものはすべて焼き払う習慣になっていた（人見 1970）。これも住民のことを考えての行為だと思われる。

「ヤーラモシ」が始まった時期は定かではないが、1955 年（昭和 30 年）以前であることは間違いない（人見 1945）。また、T.T氏によると、昔は刈り残しが少ないため、「ヤーラモシ」の規模が小さかったという<sup>78</sup>。

浮島財産区が発足する 1955 年（昭和 30 年）以前は、村役場から委任を受けた柳縄（現在の柳縄第一と柳縄第二に当たる）と原（柳縄以東の一带の総称）の若者達が「ヤーラモシ」を行っていた（人見 1945）。しかし、それ以降は、浮島財産区管理委員が中心となって行うようになり、その形態が 2005 年まで続いていた<sup>79</sup>。なお、買収以後の「ヤーラモシ」は、水資源機構が浮島財産区管理委員に依頼する形で行われていたという<sup>80</sup>。

かつて「ヤーラモシ」の実施日は 2 月 14 日と決まっていたが（浜田 1965）、いつしか、その決まりがなくなり、2 月の下旬から 4 月の上旬に行われるようになった（表 8）。1990

---

<sup>77</sup> 2007 年 8 月 24 日の聞き取りによる。

<sup>78</sup> 2007 年 8 月 19 日の聞き取りによる。

<sup>79</sup> 2007 年 8 月 19 日の T.T.氏への聞き取りによる。

<sup>80</sup> 2007 年 8 月 19 日の T.T.氏への聞き取りによる。

年（平成 2 年）と 1991（平成 3 年）には、「夢のうきしま野火まつり」という村おこしのイベントの中で「ヤーラモシ」が行われた（桜川村役場 1990; 1991）。T.Y.(1)氏からの聞き取りによると、この 2 年間は萱刈りが禁止されていたという<sup>81</sup>。また、1991 年（平成 3 年）の「ヤーラモシ」に関しては、鳥類のために植生を残してもらいたいという日本野鳥の会の要望により、前年よりも規模が縮小されて行われた（桜川村役場 1991）。

元財産区管理委員の M.H.氏によると、「ヤーラモシ」は風を見ながら行う必要があり、非常に難しい作業であったという<sup>82</sup>。また、準備も大変であったという話も同氏から聞くことができた。一方、O.S.氏は「ヤーラモシ」を「面白半分」と語っており<sup>83</sup>、苦勞とともに楽しさが伴う作業であったことが伺える。M.H.氏が委員をしていた頃（1984 年～1996 年）は、妙岐の鼻の全域を燃やす「ヤーラモシ」が行われていた<sup>84</sup>。萱があるところはよく燃え、ヨシがあるところは燃えにくかったという。また、特に苦情などはなかったようである。

1998 年（平成 10 年）から 2005 年（平成 17 年）の間は、水資源機構の意向により、焼く場所を一年毎に変え、さらに全体の 1/3～1/2 程度の植生を残す「ヤーラモシ」が行われていた。これは春先の野鳥の繁殖場所を確保するためである（根岸ら 2002）。水資源機構職員の M.T.氏の話によると、1996 年に妙岐の鼻が火事で全焼した際、オオセッカのテリトリー数に影響があったため、このようなやり方が開始されたという<sup>85</sup>。

そして、2005 年以降、「ヤーラモシ」は行われていない。この理由については、第 3 章で詳しく述べる。

---

<sup>81</sup> 2007 年 8 月 3 日の聞き取りによる。

<sup>82</sup> 2007 年 12 月 18 日の聞き取りによる。

<sup>83</sup> 2007 年 11 月 22 日の聞き取りによる。

<sup>84</sup> 2007 年 12 月 18 日の M.H.氏への聞き取りによる。

<sup>85</sup> 2007 年 8 月 29 日の聞き取りによる。

表 8. 「ヤーラモン」の実施日

西暦	年号	実施日	備考
1967	昭和 42	3月9日	
1970	45	3月23日	
1980	55	4月5日	
1986	61	4月9日	
1990	平成 2	3月10日	第一回夢のうきしま野火まつり
1991	3	2月23日	第二回夢のうきしま野火まつり
1994	6	2月24日	
1996	8	2月6日	火事による焼失
1998	10	3月25日	
1999	11	3月24日	
2000	12	3月27日	
2003	15	3月6日	
2004	16	3月3日	
2005	17	3月1日	

出典：桜川村役場（1967;1970;1980;1986;1990;1991;1994）、根岸ら（2002）、日本ナショナルトラスト（2003）、朝日新聞（2005年3月2日）、かすみがうらネット HP をもとに筆者作成

※ 上記の文献で確認できた実施日のみを示した

## 2-11 コジュリン問題

妙岐の鼻には環境省のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されているコジュリンが生息する。このコジュリンは 1966 年（昭和 41 年）に日本野鳥の会茨城県支部の会員によって発見され、以後、数々のトラブルの原因となってきた。

最初に起こった問題は 1972 年（昭和 47 年）に着工された広域農道に関する。広域農道とは牛久町（現牛久市）から東村（現稲敷市）を結ぶ延長約 35km の大型道のことであり、その内、約 12km が桜川村（現稲敷市）を通る。広域農道の建設に当たって、桜川村と東村の間に橋を架けることが計画されていた。しかし、その位置を巡って、コジュリンの保護を考える日本野鳥の会茨城県支部（以下、野鳥の会とする）と桜川村および東村が対立したのである。野鳥の会はコジュリンが光や騒音に弱いことを理由として、図 17 の点線の位置に橋を建設するよう訴えた。一方、桜川村と東村は橋の長さが最短となる実線の位置での建設を望んだ。点線の位置になった場合、架橋の経費は数倍となり、さらに将来

の耕地計画にも影響を及ぼす可能性があるからである（桜川村役場 1977）。浮島地区は周辺を埋め立てたあとも交通の便が悪く、陸の孤島と呼ばれるほどで、道路整備は地域住民の懸念だった。そのため、「農道というより浮島の人にとっては生活道路」と言われていたほどである（新しいばらき 1977 年 9 月 12 日発行）。

この問題に関して、浮島地区の住民はどのような感情を抱いていたのだろうか。桜川村役場（1972）に次のような声が載っていた。

「こじりんのことから村有草地のあたりその外の野鳥まで保護される地域になるというのはしがある。野鳥がどんどん集まってはばをきかせたら、農作物の被害は今より大きくなる。村はこんなところも考えてほしい（浮島中年男性）」

「架橋のあたりは浮島でもいちばん広い水田地帯、橋の位置のためにこの耕地を斜めにつぶすことは大問題だし、反対するほかない。草場のほんのわずかを削ってもこじりに影響はない（浮島中年男性）」

この二人が浮島地区の住民を代表しているわけではないが、浮島地区の中に、コジュリンに対して良い感情を抱いている人が多くないことを思わせる発言である。

最終的な結論が出たのは 7 年後の 1977 年（昭和 52 年）であった。①コースをできる限り南側に変更する、②同村で野鳥の保護対策協議会を設け、野鳥の会会員の指導で今後も野鳥の保護に力を入れる、という 2 点で合意に達したのである（新しいばらき 1977）。なお、1972 年（昭和 47 年）に建設された稲敷大橋は騒音や光に配慮され、高欄と照明灯に工夫がされている（桜川村役場 1986）。

聞き取り調査をしても、コジュリンの話題はよく出てくる。例えば、M.K.氏とY.M.氏は次のようなやりとりをしている<sup>86</sup>。

---

<sup>86</sup> 2007 年 8 月 24 日の聞き取りによる。

M.K. : 「だからコジュリンがいなければ、これ（萱場）がいつもきれいになってね。」

Y.M. : 「これ燃やせのが、きれいになんだよ。燃やせねえからしょうねえよな。」

M.K. : 「燃やせねえから、燃えねえところが多くなっちゃまいね。」

Y.M. : 「だからすべてヨシからカヤもう悪くなっちゃうんだいな。」

また、このようなやりとりもあった<sup>87</sup>。

M.K. : 「つまんねえことやったらコジュリンのやつらに怒られちゃう。」

Y.M. : 「だからこいつ多く燃した、燃さねえでもね。」

両者ともコジュリンを否定的に捉えていることがよく分かる。また、両者はコジュリンの存在によって、「ヤーラモシ」が自由に行えなくなったと考えているようだ。

コジュリンに関して、萱師のM.Y.氏は次のように語っている<sup>88</sup>。

「(コジュリンは) 自分食べる餌をカヤ刈ったあと求めてくんだよ。そんでそこさ住みつくわけだない。・・・餌求めてくるわけだ。俺、語っては本気にしねえんだ、みんな。俺、商売やってるから。・・・おらがカヤ刈ところ、求めてくんだ。そんでこんだほんだ、刈ったあと青い新芽が出てくっぺ。そいつは巢くうわけだ。今、(刈っている場所が) あのところ (図 15 参照) しかねえから、前ほどすくねえ。みんなわかんねえ。」

萱を刈ることで、コジュリンが採餌、繁殖できるという内容である。しかし、それを訴えても、萱で商売をしていることから、みんなが耳を傾けてくれないと M.Y.氏は嘆いているのである。

---

<sup>87</sup> 2007 年 8 月 24 日の聞き取りによる。

<sup>88</sup> 2007 年 8 月 23 日の聞き取りによる。

一方、N.G.氏、M.H.氏、T.H.氏らは「コジュリンを見たことない」と発言しており、姿すら知らないコジュリンの保護が浮島地区の人々に押し付けられていたことが伺える。

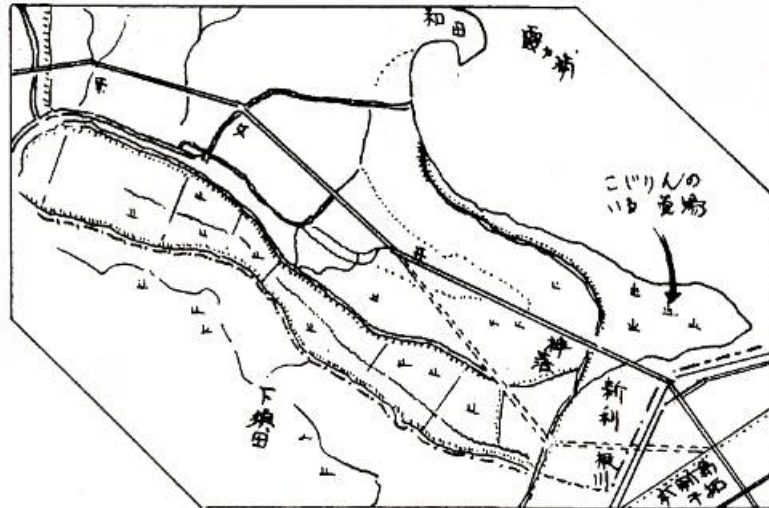


図 17. 2 つの稲藁大橋建築予定地（桜川村役場 1972）

## 2-12 小括

本章では、妙岐の鼻でこれまで行われてきた人間の営みについてまとめた。

地形の変化に関しては、干拓や堤防建設の影響が大きく、それに伴って萱場の面積が減少していったことが明らかとなった。

妙岐の鼻の所有権は、浮島村、浮島財産区、水資源開発公団（現：水資源機構）の順で変わっていったが、萱刈りは常に旧浮島村の住民によって行われていた。

水資源開発公団に所有権が移った 1987 年（昭和 62 年）まで、妙岐の鼻は入会地的に利用されていた。入会権を持つ旧浮島村の 225 戸の旧家は、自家消費を目的として萱を刈り取っていた。その当時、妙岐の鼻では、萱師による刈り取りも行われていた。萱師は刈り取った萱を浮島地区外で売却していた。

萱葺き屋根の減少に伴い、自家消費的な萱の利用は徐々に減少していった。一方、萱師は萱葺き職人は文化財関係の需要があることから、今でも萱刈りを行っている。

「ヤーラモシ」は、妙岐の鼻に生育する萱やヨシの量や質を維持するために行われてい

た。また、妙岐の鼻にはコジュリンに代表される希少な鳥類が生息することから、「ヤーラモシ」や橋の建設を巡って、これまで住民と野鳥の会の間で、何度かトラブルが起きていた。

### 第3章 「ヤーラモシ」に対する多様な価値観の交錯

#### 3-1 はじめに

現在は中止されているが、妙岐の鼻では2005年（平成17年）まで「ヤーラモシ」と呼ばれる野焼きが行われていた。

妙岐の鼻と同様、野焼きが中止となった例は日本各地で見られる。例えば、青森県岩木川下流部のヨシ原では、2005年（平成17年）を最後に現在、野焼きが行われていない。これは野焼きに対して多くの苦情が寄せられるようになったためである（寺林 2006）。一方、途絶えていた野焼きが復活した例もあり、群馬県の上の原などはこれに当たる（匿名 2007）。野焼きを復活させる目的は主に景観の再生や維持である。このように場所によって野焼きが中止されたり、復活したりする理由は、野焼き自体や野焼きが行われる場所に対する価値観が人によって大きく異なるためであると思われる。

そこで本章では、「ヤーラモシ」が中止に至った経緯と中止に対する人々の思いを、価値観に着目しながら論じる。

#### 3-2 「ヤーラモシ」が中止に至ったきっかけ

稲敷市役所総務部管財課職員のI.M.氏（現：教育委員会学校教育課）によると、「ヤーラモシ」が中止に至ったきっかけは、つくば市の団体からのクレームにあるという。2005年（平成17年）の「ヤーラモシ」終了後、その団体は「野焼きは環境汚染である」ということを理由に、「ヤーラモシ」に対して異議を申し立て、今度も実施するのであれば裁判を起こすと稲敷市役所に主張した<sup>90</sup>。これを受け、「ヤーラモシ」の実施主体である浮島財産区管理会は、2005年12月21日に2006年（平成18年）の実施の是非について検討を行った<sup>91</sup>。その結果、今後は主体者として実施しないことが決定した。

では、「ヤーラモシ」の中止に対して、妙岐の鼻とかかわりを持つ人々はどのような思い

---

<sup>90</sup> 2007年2月8日のI.M.氏への聞き取りによる。ただし、このクレームには科学的な根拠はなかったという。

<sup>91</sup> 稲敷市役所提供資料による。

を抱いているのだろうか。

### 3-3 「ヤーラモシ」の中止に対する各アクターの思い

妙岐の鼻と深いかわりを持っていると思われる人々を、水資源機構、稲敷市役所、浮島財産区管理会、萱師・萱葺き職人、文化財関係者、生態学者の計 7 アクターに分類し、「ヤーラモシ」の中止の対する思いをそれぞれ聞き取った。

#### 3-3-1 水資源機構

現在、妙岐の鼻の所有権は水資源機構にある。「ヤーラモシ」について、職員のI.N.氏（2007 年 3 月まで環境課長）は次のように語った<sup>92</sup>。

「うち（水資源機構）としてはですね、昔から刈り取りして、火入れして、それで今の環境がなりたっているんで、火入れがなくなると環境が変わっていくんじゃないってゆーのを危惧してましてですね、できれば火入れを続けてもらいたいなと思っています。それは火入れ実施者（稲敷市）の立場というか事情があるので、うちで口出しするわけにはいかないです」

また、同職員のO氏からはこんな話を聞くことができた<sup>93</sup>。

「鳥類の関係で三分の一くらいは（植生を）残したほうがいいっていうのが分かってきたんで、焼く範囲だけこうやって下さいというお願いはしてる。」

「ヤーラモシ」の許可を出す水資源機構は、「ヤーラモシ」を肯定的に捉えており、再開されることを望んでいる。しかし、鳥類への配慮のため、全面焼却には反対という姿勢で

---

<sup>92</sup> 2006 年 10 月 16 日の聞き取りによる。

<sup>93</sup> 2007 年 8 月 29 日の聞き取りによる。

ある。

### 3-3-2 稲敷市役所

「ヤーラモシ」に関する事務的な仕事を行うのは、稲敷市役所総務部管財課の職員である<sup>94</sup>。2005年（平成17年）の「ヤーラモシ」の際、職員は事前に潮来市長、麻生町（現行方市）長、鹿行地方広域市町村圏事務組合消防本部（現鹿行広域事務組合消防本部）、国土交通省といった周辺機関への通知、防災行政無線での周知、桜川村全域に対してのちらし配布、稲敷地方広域市町村圏事務組合消防本部と江戸崎警察署（現稲敷警察署）への届出などを行った<sup>95</sup>。また、当日は現地に行っている<sup>96</sup>。

「ヤーラモシ」についてI.M.氏はこう語った<sup>97</sup>。

「うち（市役所）のほうは（妙岐の鼻を）売っちゃったんだから（クレームの責任を取るのは）うちのほうじゃないよ、で、水資源は、いや、うちのほうは刈らせてやってるんだから、その管理はどうせあなたたちのですよっていうふうな感じになっちゃっているから、お互いにこんな感じなんです。平行線をたどっちゃって、だから、クレームに対する、対処にしかたっていうのが、やっぱりいや、市役所のほうだ、いや、水資源のほうだって、今そういうふうな状態なんです。うちの方はきちっと水資源の方が主導的な立場でもって燃やします、協力して下さいって言えば刈らせてもらっている以上はうちの方は協力します。でも水資源はいや、うちの方でうちの方の所有だけども、カヤを刈るのはそちらだからそちらで勝手についていうか、燃やすんだったらどうぞって感じで。」

責任の所在が不明確であることが、「ヤーラモシ」が再開されない原因の一つであるよう

---

<sup>94</sup> 2007年2月8日のI.M.氏への聞き取りおよび稲敷市役所提供資料による。

<sup>95</sup> 稲敷市役所提供資料による。

<sup>96</sup> 稲敷市役所提供資料による。

<sup>97</sup> 2007年2月8日の聞き取りによる。

だ。市役所は、妙岐の鼻の所有権を持つ水資源機構が「ヤーラモシ」の実施主体になるべきであると考えており、主体者になりさえしなければ、「ヤーラモシ」に対して非常に協力的な姿勢である。

また、クレームについて、I.M.氏はこう語った<sup>98</sup>。

「本当にシマガヤってというのが、そういうふうに枯れたところを燃やさないで新しい芽吹きがでないとか、本当に立証されている、それでまた燃すことがダイオキシンにつながらない、その数値は燃やした時と燃やさない時とこれだけの数値の差しかないから、なんら影響はありませんよっていうふうな、そういった数字がなければうち（市役所）のほうは対抗できない。ただ漠然として、今までみたいに伝統行事だからというふうなことでは、今の世の中はやっぱ対応はできないですよ。」

クレームに対抗できる科学的な情報がないことも、市役所が「ヤーラモシ」を主体的に引けない理由の一つであるようだ。さらにこんなことも語っている<sup>99</sup>。

「行政の立場としてはやっぱり、一部の人のためだけに市を矢面に立たせるわけにはいかない。クレームがついて、例えば裁判なんかになった場合には、要するに浮島の地区の人たちがもっとたくさんカヤを刈っていればまた別です。たった五人。・・・その五人も売っているんですよ。カヤを。そこをやっぱりちょっとこう考えなければいけないところかな。カヤを売らないで、自分たちの本当の生活のために使っているんだっていう人たちがたくさんいれば、それは行政としてやっぱりやるべきことです。矢面に立ったとしても。でもそうじゃないでよ、現状は。その人たちはだってお金を儲けてるだけでしょ。その片棒を結局かつぐわけでしょ。早い話が。だからそれができないんですよ。」

---

<sup>98</sup> 2007年2月8日の聞き取りによる。

<sup>99</sup> 2007年2月8日の聞き取りによる。

萱刈りを行っている人が少ないこと、そして、その人たちが萱刈りによって経済的な利益を得ていること、この２点も市役所にとって考慮すべき問題であるようだ。

以上のことを総合すると、市役所は「ヤーラモシ」そのものに反対しているわけではなく、「ヤーラモシ」の実施主体になることに反対していることが分かる。

### 3-3-3 浮島財産区管理会

妙岐の鼻が水資源機構に買収された 1987 年（昭和 62 年）以降も、水資源機構の依頼により、浮島財産区管理委員が「ヤーラモシ」を継続して行っていた<sup>100</sup>。「ヤーラモシ」の日程も管理会のほうで決めていた<sup>101</sup>。「ヤーラモシ」の中止について、管理会の会長 T.T.氏は次のように語った<sup>102</sup>。

「今はいまだに水資源が燃してくれ燃してくれやってっから、燃すんだら主催はそっちになれつうことで、おらほはいくらでも協力すっから、今まで通りの協力でやるから、だからおまえら主催になれつって・・・」

市役所と同様、水資源機構が「ヤーラモシ」の実施主体になるべきであり、そうなれば管理会は協力するという内容である。またこんなことも語っている<sup>103</sup>。

「（「ヤーラモシ」を行って喜ぶのは）萱師の人たちと、あとは水資源の人でもって貴重な植物の絶やさねえですむということだけで水資源なんか顔立つからそれくれえのどこんだっぺ。やだよって言ったよ。だからそれくれえのことで俺らは利益になんねえらおむ。」

---

<sup>100</sup> 2007 年 8 月 19 日の T.T.氏への聞き取りによる。

<sup>101</sup> 2007 年 8 月 19 日の T.T.氏へ聞き取りによる。

<sup>102</sup> 2007 年 8 月 19 日の T.T.氏へ聞き取りによる。

<sup>103</sup> 2007 年 8 月 19 日の聞き取りによる。

貴重な植物の保全のために「ヤーラモシ」を行うという論理は、委員会には正当化されないようである。さらに、こんな話も聞くことができた<sup>104</sup>。

「（「ヤーラモシ」を）伝統的にやってたのなんなのつっても、言い伝えで残っているだけで、そいつの書類化されたものは全然ねえからね、で、この植物を絶やさねえためにこうなんだというデータも持ってねえしよ。・・・（クレームに）反論できるって材料があんめえよ。それでしょうがねえからやめっぺっていうことだよ。」

「ヤーラモシ」を行わない理由として、「ヤーラモシ」に関する文書や科学的な情報が無いことを挙げている。この点についても市役所の意見と共通している。

また、浮島財産区管理会としては、「経済的利益を得ている人のために、どうして我々がクレームの矢面に立たなければいけないのか」、という考えもあるようである<sup>105</sup>。

### 3-3-4 萱師・萱葺き職人

2006 年度（平成 18 年度）に萱刈りを行った萱葺き職人の N.T.氏、萱師の M.Y.氏、M.M.(1)氏の 3 人に、「ヤーラモシ」に対する考えを聞いた。その結果、それぞれが異なる意見を持っていたことが明らかになった。N.T.氏や M.Y.氏は「ヤーラモシ」の再開を強く望んでい  
るのに対し、M.M.(1)氏は二人ほど強い気持ちを抱いていなかった。この気持ちの違いは萱の注文の多さによる。N.T.氏や M.Y.氏は注文が多く、萱が足りていない状態である。一方、M.M.(1)氏は現在の収穫量で十分注文に応じることができ、さらに聞き取りをした時点で、まだ注文が入っていない状態であった<sup>106</sup>。「ヤーラモシ」について N.T.氏はこう語った<sup>107</sup>。

---

<sup>104</sup> 2007 年 8 月 19 日の T.T.氏へ聞き取りによる。

<sup>105</sup> 2007 年 2 月 8 日の I.M.氏への聞き取りによる。

<sup>106</sup> 2007 年 11 月 10 日の聞き取りによる。

<sup>107</sup> 2007 年 9 月 4 日の聞き取りによる。

「燃せばええカヤ出るわけよ。だけっど、今現在燃さねえから、カヤがだんだんだんだん悪くなっちゃうわけよ。」

「ヤーラモシ」を行わない状態が続くと、萱の質がどんどん悪くなるというわけである。また、元萱師N.G.氏の「悪いカヤだと（売る時）ちょっと申し訳ない」、「（よくない萱を持っていくと）屋根屋（萱葺き職人）に怒られんの」という語りから分かるように<sup>108</sup>、N.T.氏は萱師として、M.Y.氏は萱葺き職人として、いい仕事をしたいという気持ちから、「ヤーラモシ」の再開を望んでいるとも考えられる。

「ヤーラモシ」と鳥類の関係について、N.T.氏から次のような話を聞くことができた<sup>109</sup>。

「（妙岐の鼻には）色々な鳥いっけども、だから、ヨシが、夏のこと、ヨシがこうげにヨシがこう出てる、青いの。そこんどこさ、こうげにこう巣つくって、そこに卵を産んで、そんでほれ育ててるわけだから、だからこんなにでかくなっちゃってからには、ほんなにょ、あれなんだよ、だから燃してもよ、鳥は一端はほれ火燃されたら飛ぶけども、また、すぐに戻ってきちゃうんだよ。」

N.T.氏は「ヤーラモシ」が鳥類に悪影響を与えるとは考えていないようである。M.Y.氏も同様の考えを持っている。さらに萱刈りに関して、N.T.氏はこう語った<sup>110</sup>。

「水資源公団がこれカヤ刈ってはダメだよと言われたら、おらほは刈れねえわけだ、土地売っちゃったんだ。だから、すまねえがって市さ話して、12月の1日からカヤ刈らせてくださいよということに市役所さ、おらは申し込むわけ。」

水資源機構に対する遠慮が感じられる発言である。おそらく、N.T.氏は「ヤーラモシ」に

---

<sup>108</sup> 2007年7月30日の聞き取りによる。

<sup>109</sup> 2007年9月4日の聞き取りによる。

<sup>110</sup> 2007年9月4日の聞き取りによる。

関しても遠慮の気持ちを抱いており、そのやり方や再開に関して強い主張はしないと思われる。そのようなことをすることで、萱刈りが禁止されてしまつては、N.T.氏にとって元も子もないからである。

### 3-3-5 文化財関係者<sup>111</sup>

ここでいう文化財関係者とは K.N.氏のことである。K.N.氏は、萱師である M.Y.氏と仕事上の繋がりがある。M.Y.氏と知り合ったのは 14、5 年前。K.Y.氏が文化財に指定された萱葺き民家の設計・管理を行い、M.Y.氏が萱を供給するという関係である。2006 年（平成 18 年）に「ヤーラモン」が実施されないことを知った K.N.氏は、2006 年 1 月 5 日に M.Y.氏と共に稲敷市長を訪れ、再開を訴えた。しかし、本章の 4 節で述べた理由により、その要望は受け入れられなかった。

また、K.N.氏は浮島財産区管理会の会長宛に「野焼き施行要望書」を送ることもしている。要望書の中で、K.N.氏は良質な萱を得るためには春の芽吹き前に枯れ草を焼く必要があると述べている。そして、野焼きを行うことにより、①稲敷市や霞ヶ浦周辺の萱葺き民家の材料が確保され、民家所有者生活と地域文化の継承が可能となる、②国指定重要文化財並びに県指定等自治体指定の萱葺き建造物の萱の安定した供給を確保し、国や自治体の文化財行政に協力並びに寄与できる、③文化の継承・文化財行政への協力並びに寄与という視点から萱を供給することで、希少になった萱葺き職人の育成が可能となる、④里山同様に、人間と共生している自然を保護できる、と主張している。

要望書を受けた管理会は、2006 年 1 月 25 日に野焼きに関する協議を行った。管財課の職員らもそこに同席した。協議の中では、本章の第 6 節で挙げた会長の発言のほかに、「文化財保護の観点からすれば国と水資源機構の関係ではないか」、「恒例で実施しているだけで、水資源機構の所有地をこちらが燃やすことはいかがなものか」、「萱を利用する者と水資源機構の関係であるので、利用するものが主体となって野焼きを行えばよい」、「植物学の観点からすれば燃やした方がよいだろうが、萱の生育はそればかりでなく、霞ヶ浦の水

---

<sup>111</sup> 2007 年 8 月 30 日の聞き取りと本人提供資料による。

位が上がってきていることも一つの要因ではないか」などの意見が挙がった。そして、最終的には、責任の所在が明確にならない限り、野焼きは実施すべきではないという結論に落ち着いた。野焼きが再開されないことに、K.N.氏は次のように語った。

「入会権を持ってこの地区（浮島地区）の人があそこ（妙岐の鼻）でカヤを刈りだしている。少なくとも春には火をつけてるわけですから。そういった何百年と繰り返されてきた、そういう中で少なくとも形成されてきた限定的な自然なんですよ、限定的な自然。それに里山と同じように人間の一定の手が入る、管理された中での自然だったんです。ですからそれを燃やしちゃいけない、自然のままにするっていうのは・・・」

K.Y.氏は、妙岐の鼻の自然は人間の管理によって成り立ってきた自然であるとし、その管理の中に野焼きを位置づけている。また、妙岐の鼻には、そのような自然に適応した動植物が生育・生息していると考えている。この考えは水資源機構と一致する。しかし、K.Y.氏は、文化財に指定された萱葺き民家への良質な萱の供給を第一条件に考えているのに対し、水資源機構はそれよりも環境保全を優先しているため、この点において両者は異なっているといえる。

### 3-3-6 生態学者

国立環境研究所に勤める鳥類の専門家N.H.氏は、妙岐の鼻と利根川下流域のヨシ原で行った調査の結果から、野焼きなどの攪乱は3年以上の間隔をおいて行われるべきである、と考えている<sup>112</sup>。なぜなら、攪乱がない状態では、植生遷移の進行によりヨシ原が維持されず、毎年や隔年といった頻繁な攪乱では、湿地性鳥類群集に悪影響を与えるためである<sup>113</sup>。

また、東京大学に勤めるN.J.氏は、植物の保全の観点から、野焼きは毎年行われたほうが

---

<sup>112</sup> 第51回日本生態学会大会釧路大会での発表による。

<sup>113</sup> 第51回日本生態学会大会釧路大会での発表による。

いいと考えている<sup>114</sup>。

### 3-4 小括

「ヤーラモシ」はクレームがきたことがきっかけとなって、行わなくなった。裁判などの法的手続きをちらつかせるクレームという存在が登場したことで、「ヤーラモシ」を行う正当性が法的な根拠も含めて問われたときに、浮島財産区管理会などはそれを支える根拠を見出せなかったからである。また、このクレームによって、萱師や萱葺き職人による萱刈りが「経済的な行為」としかみなせないことが表面化したように思われる。

各アクターの発言を聞いてみると、「ヤーラモシ」に反対の姿勢をとっているのは、浮島財産区管理会と稲敷市役所であることが分かった。一方、賛成の考えを持っているのは、水資源機構、萱師・萱葺き職人、文化財関係者、生態学者であることが分かった。しかし、ここで注意してもらいたいのは、浮島財産区管理会と稲敷市役所は「ヤーラモシ」の実施主体になることに反対しているのであり、「ヤーラモシ」自体に反対しているわけではないということである。そして、賛成の考えを持っている各アクターは、自分たちが実施主体になることを抜きにして、そのような姿勢をとっているのである。彼らが「ヤーラモシ」の再開を望む理由は、大きく 2 つに分けることができる。水資源機構と生態学者が「広義の環境保全」、萱師・萱葺き職人と文化財関係者が「文化財に指定された萱葺き民家の保護」である。しかし、萱師・萱葺き職人と文化財関係者 K.N.氏の主張は彼らの「経済的利益」とも関係している。そのため、公平性を保たなければいけない稲敷市役所や浮島財産区管理会はそのことを意識しているところがある。また、稲敷市役所や浮島財産区管理会にとって、「ヤーラモシ」を行うインセンティブがないことも、「ヤーラモシ」が再開されない原因の一つであるだろう。

---

<sup>114</sup> 2007 年 9 月 13 日の聞き取りによる。

## 第4章 妙岐の鼻における生態系保全のあり方

### 4-1 はじめに

第2章では、妙岐の鼻における歴史を聞き取り調査の結果をもとにして再構成していった。また、第3章では、「ヤーラモシ」が中止に至った経緯と、「ヤーラモシ」に対する多様な価値観が交錯している様子を描いた。

本章では、2章の内容をまとめるとともに、それと第3章の内容を踏まえ、「ヤーラモシ」が現在置かれている状況について分析する。そして、その分析の結果から、妙岐の鼻における生態系保全のあり方を検討し、本論文のまとめとしたい。なお、ここでいう「地域」とは「浮島地区」を指す。

### 4-2 妙岐の鼻の利用形態の変化

本節では、「萱刈り」と「ヤーラモシ」に焦点を当てながら、第2章の内容をまとめてみたい。妙岐の鼻の利用形態は、水資源開発公団の買収によって、大きく変化した。そのため、買収が行われた1987年（昭和62年）の前後で、時代を2分し、それぞれの時代の利用形態について説明する。

#### 4-2-1 水資源開発公団買収以前（1987年、昭和62年以前）

1955年（昭和30年）に浮島村が古渡村と合併した際、妙岐の鼻の所有権は、浮島村から浮島財産区へと変わり、それと同時に、管理主体が村から浮島財産区管理会に移った。しかし、旧浮島村の住民が、妙岐の鼻を所有し、管理しているという構造は連続的に保たれていた。

この時代、妙岐の鼻は入会地的に利用されていた。入会権（採草権）を持っていたのは、浮島地区にある225戸の旧家であり、この権利は長子相続で本家に継承された。権利を持つ家々のそれぞれの刈り場所は、抽選によって決められた。刈り取られた萱は、主に屋根の葺き替えや修復に利用された。また、権利を持たない家の人たちは、本家などの親しい

家から権利を借りて萱を刈り取り、それを屋根に利用していた。すなわち、これらは自家消費的な萱の利用といえよう。一方、妙岐の鼻では、萱師による萱の利用もみられた。萱師は刈り取った萱を浮島地区外で売却していた。萱師の家も入会権（採草権）を持っていたが、それだけでは萱が足りないので、萱師は権利を行使しない家々から、毎年権利を購入していた。

浮島地区に萱葺き民家が多かった頃、妙岐の鼻では、自家消費を目的とした萱刈りが中心であったと思われる。もちろん、萱師も萱を刈っていたと思われるが、生活面での萱の必要性の高さを考慮すると、このような状況が想像される。また、この頃は、ほぼ全域が刈り取りの対象であったとのことなので、「ヤーラモシ」は実施されていなかったか、もしくは規模が小さかったと思われる。

1945 年頃（昭和 20 年頃）から、屋根が萱葺きからトタンや瓦へと変わってきた。それに伴い、萱刈りを行わない家が徐々に増え始め、自家消費的な萱の利用が少なくなっていた。一方、萱師による萱刈りは、未だ続いており、萱師は、良質な萱が生育する場所を選択的に刈り取っていたという。また、この頃から、刈り残しが出るようになり、その結果、「ヤーラモシ」の規模が大きくなっていったと思われる。「ヤーラモシ」によって妙岐の鼻に生育する萱の量や質は維持されていた。そのため、萱葺き民家に住んでいる住民や萱師という萱を利用する人々にとって、「ヤーラモシ」は大きな意味を持っていたと思われる。また、権利を持つが、萱葺き屋根をやめた家にとっても、「ヤーラモシ」は未だ意味のある行為であり続けた。なぜなら、抽選で、良質な萱が生育する場所に当たった年は、萱師に権利を売ることができていたからである。「ヤーラモシ」が行われていなければ、おららく当たる確率が下がり、現金収入の機会が減ったことだろう。なお、浮島財産区が発足した 1955 年（昭和 30 年）以降は、浮島財産区管理会が「ヤーラモシ」を行うようになった。

#### 4-2-2 水資源開発公団買収以降（1987 年、昭和 62 年以降）

水資源開発公団による買収に特に反対の姿勢であったのは、20～30 件程度あった萱葺き

民家に住む人々であった。しかし、買収後も継続して萱が採取できる、補償金が出る、などの理由から、最終的にその人たちも買収を認めることとなった。買収によって、入会権（採草権）は消滅した。しかし、実質的には、今でも、浮島住民のみが萱刈りを行っている状態である。

買収後しばらくは、自家消費的な萱刈りも行われていたと思われるが、この時代の中心は、萱師や新たに参入した萱葺き職人による萱刈りであった。現在、萱刈りを行っているのは、2人の萱師と萱葺き職人1人である。

萱刈りに関しては、買収以前にあった抽選によって刈り場所を決めるルールがなくなり、新たなルールが設けられた。それは、萱葺き民家に住んでいる人が、優先的に刈り場所を選ぶことができるというルールである。萱葺き民家に住む人々の生活を守るという意味で、このようなルールが設けられたと思われる。しかし、現在、萱葺き民家は2軒しかなく、さらに、その2軒も萱師や萱葺き職人から、萱を提供もしくは販売してもらう状態である。そのため、このルールは明確には行使されていない。

「ヤーラモシ」は買収後も、水資源機構から依頼される形で、浮島財産区管理会が継続して行っていた。そして、自家消費的な萱刈りがなくなってからも、「ヤーラモシ」は続けられていた。すなわち、その時の「ヤーラモシ」は萱師と萱葺き職人にとってのみ意味のある行為であったといえよう。

#### 4-3 「ヤーラモシ」のレジティマシーと妙岐の鼻の生態系保全

本節では、「萱刈り」や「ヤーラモシ」が、市場経済的な営みであるかどうか、また、歴史的、文化的にどういう意味があるか、について分析した。そして、それを踏まえ、妙岐の鼻の生態系保全はどうあるべきかについて考察した。

2005年（平成17年）の野焼き終了後、「野焼きは大気汚染であり、今度も実施するのであれば裁判を起こす」という内容のクレームが稲敷市役所に届けられた。これを受け、「ヤーラモシ」の実施主体である浮島財産区管理会は、今後の実施の是非について検討を行った。その結果、今後は主体者として実施しないことが決定した。

「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」により、野焼きは基本的に禁止されている。また、大気汚染はそれなりに公共的な問題でもある。そのため、クレームにはそれなりの根拠があると思われる。しかし、果たして、それは絶対的なのだろうか。同法では、風俗習慣上または宗教上の行事を行うために必要な廃棄物の焼却を例外としてみなしているが、「ヤーラモシ」はこれに当たらないのだろうか。つまり、「ヤーラモシ」は文化的・歴史的に見て意味がある行為ではないのだろうか。

そもそも、「ヤーラモシ」を実施してよいかというのは、社会的な承認が得られるかどうかの問題である。この社会的な承認、つまりレジティマシーについては、宮内（2006）に詳しい。そのため、本節ではそれを参考にしながら、「ヤーラモシ」のレジティマシーについて分析したい。

宮内（2006）の中では、「歴史性」がレジティマシー獲得の要件として挙げられている。では、「ヤーラモシ」の歴史的・文化的な意味が、レジティマシーとして認められることはないのだろうか。これを支えるものとしては、妙岐の鼻で共的な利用が行われていた時から「ヤーラモシ」が行われていたや、さらに、より広い視点から捉えれば、茨城県の文化財の保護への寄与という公共性を担っていることなどが挙げられる。

それと同時に、現在の萱刈りは非常に私的な営みとして捉えられがちであるが、果たして本当にそうであろうか。一般的に、私的な営みというのは、市場経済の中で、ある特定の人物が金銭を得ることを指す。従って、萱という市場の中で金銭を得ている萱師らは、非常に私的な営みを行っているように見える。しかし、萱師の市場経済的な営みは、浮島地区という地域社会の中で管理されてきたところがある<sup>115</sup>。そういう歴史や文化と、現在の萱師らの市場経済的な営みは、完全に相反するものではないし、ある意味で、共存してきているようなもので、切り離されるようなものでもない。従って、現在の萱師らの営みを、単純に市場経済的な行為であるとは必ずしも言い切れないと思われる。つまり、それは「ヤーラモシ」が、市場経済的な利益を求めるような行為とは言い切れないことを意味

---

<sup>115</sup> 例えば、今でも、浮島財産区管理会の会長が採草許可日を決めたり、採草の区割りに立ち会ったりしている。

する。

大気汚染という公共性の強いレジティマシーは絶対的ではない。ほかのもの、すなわち「ヤーラモシ」の歴史性・文化性、そして萱師らの歴史性・文化性も、それなりにレジティマシーがある。つまり、これは「レジティマシー獲得のせめぎあい」といえるであろう。そういうなかで、「ヤーラモシ」の是非について考えていくことが、妙岐の鼻において生態系保全を行う際に、大切なことではないだろうか。

#### 4-6 「ヤーラモシ」のレジティマシーと地域社会

現在、妙岐の鼻では生態学的研究や水文学的研究が行われているが、このような自然科学の研究の結果も、「ヤーラモシ」が新たにレジティマシーを獲得する要件になりうると思われる。この正当化の論理は、「客観性」という点において強みがあり、それが、萱師・萱葺き職人や文化財関係者が「ヤーラモシ」の再開を望む論理とは異なっている。また、「ヤーラモシ」と生物多様性保全の関係は、「ヤーラモシ」の実施主体であった浮島財産区管理会や稲敷市役所が気にしているところでもある。その意味で、特に保全生態学の果たす役割は大きいと思われる。

しかし、必ずしも自然科学によって「ヤーラモシ」の実施の是非が決まるわけではない。なぜなら、現在、顕在化している問題であるが、「大気汚染」もある種、科学的な説得力を持っているからである。クレームに説得力があるように見えるのは、科学的なところを根拠にしているためである。つまり、「大気汚染」と「保全生態学」という二つの議論は、相反するかたちの方向性を示している。「大気汚染」の議論では「ヤーラモシ」には反対、「保全生態学」の議論では賛成ということである。現在、「保全生態学」という議論はあまり出てきていないが、もし、将来、そのような状況になった場合、この問題を科学で解決することは難しい。最終的には、地域社会、あるいは稲敷市もしくは茨城県という広義の地域社会の中で解決することになるであろう。このように、最終的な決定権は地域社会にある。そのため、地域社会には、「ヤーラモシ」がレジティマシーを獲得する多様な可能性を持つことを認識した上で、その是非について考えてもらうことを期待したい。

## 謝辞

本論文をまとめるに当たり、本当に多くの方にお世話になりました。指導教官である鬼頭秀一先生には、研究の進め方から、まとめ方にいたるまで、あらゆることを、いつも優しく教えて頂きました。先生のもとで研究ができ、本当によかったと思っています。また、副指導教官である清水亮先生にも多くの助言を頂きました。

浮島地区の方々は、いつも暖かく私を迎え入れてくれました。楽しくない調査など、一度たりともありませんでした。社会調査の関係上、個々にお名前を挙げることはできませんが、本当に感謝に気持ちでいっぱいです。

同じ研究室の先輩である、福永真弓さん、富田涼都さん、二宮咲子さんには、何度研究に相談にのって頂きました。お三方がいらっしゃらなければ、この論文はきっと完成しなかったと思います。また、後輩の李潔さん、恩田さくらさん、塩見記章さん、田中美季さんには、いつも元気をわけてもらっていました。

本当に楽しい 2 年間でした。この場を借りて、お世話になった方全員に、お礼を申し上げます。

表 9. 浮島地区の歴史

西暦	年号	事柄
1929	昭和 4	甘田入干拓着工(1948年完成)
1932	7	野田奈川干拓(関谷干拓)着工(1952年完成)
1947	22	本新島干拓着工(1963年完成)
1949	24	二号堤着工(1960年完成)
1954	29	神落干拓着工および完成
1955	30	浮島村・古渡村が合併し桜川村が発足
		妙岐の鼻が浮島財産区の財産となる
1956	31	阿波村が桜川村に編入
1959	34	常陸川水門着工(1963年完成)
1960	35	西の洲干拓着工(1966年完成)
1966	41	コジュリンが妙岐の鼻で発見される
1970	45	霞ヶ浦開発事業の開始
1972	47	広域農道の建設着工
1974	49	常陸川水門完全閉鎖
1975	50	常陸川水門による水位管理の開始
1977	52	広域農道のコースに関して日本野鳥の会と桜川村が和解
1980	55	日本野鳥の会が妙岐の鼻を特別保護区にすることを申請
1986	61	稲敷大橋の完成
1987	62	妙岐の鼻が水資源開発公団に買収される
1988	63	妙岐の鼻が「利根川百景」に選定される
1989	64	妙岐の鼻が「茨城の自然100選」に選定される
1990	平成 2	第一回夢のうきしま野火まつり開催
1991	3	第二回夢のうきしま野火まつり開催
1995	7	霞ヶ浦開発事業完了
1996	8	霞ヶ浦開発事業による管理の開始
1998	10	部分的な野焼きの開始
2004	16	妙岐の鼻が「水郷筑波国定公園」に指定される
2005	17	江戸崎町・新利根町・東町・桜川村が合併し稲敷市が発足

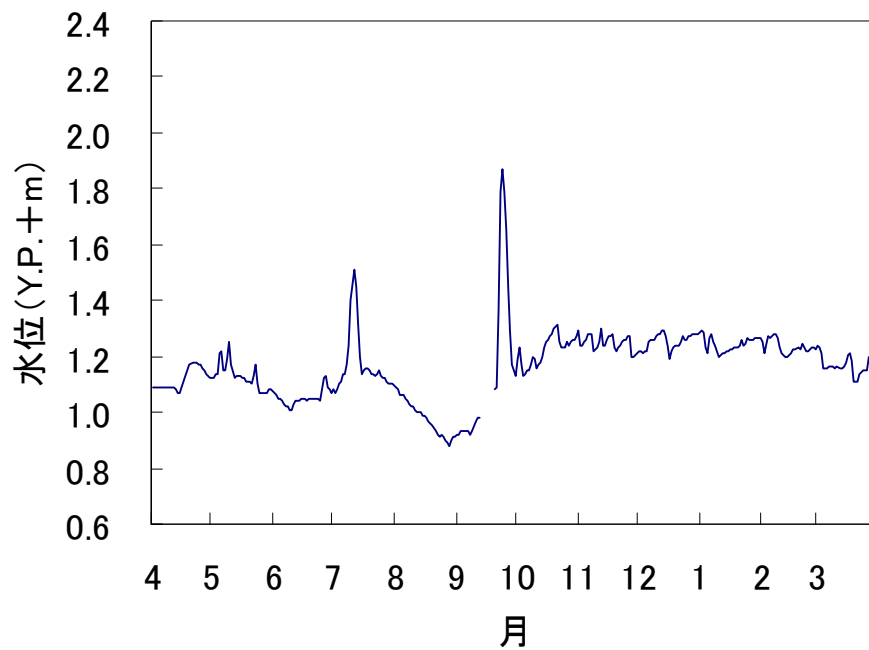


図 18. 1996 年度（平成 8 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位  
 ※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成  
 ※ 欠損値あり

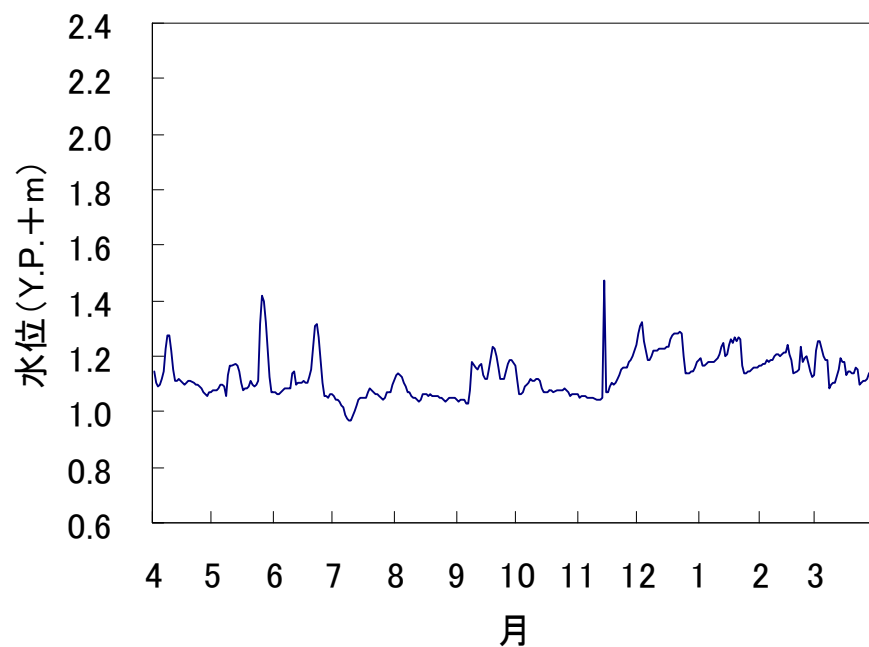


図 19. 1997 年度（平成 9 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位  
 ※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

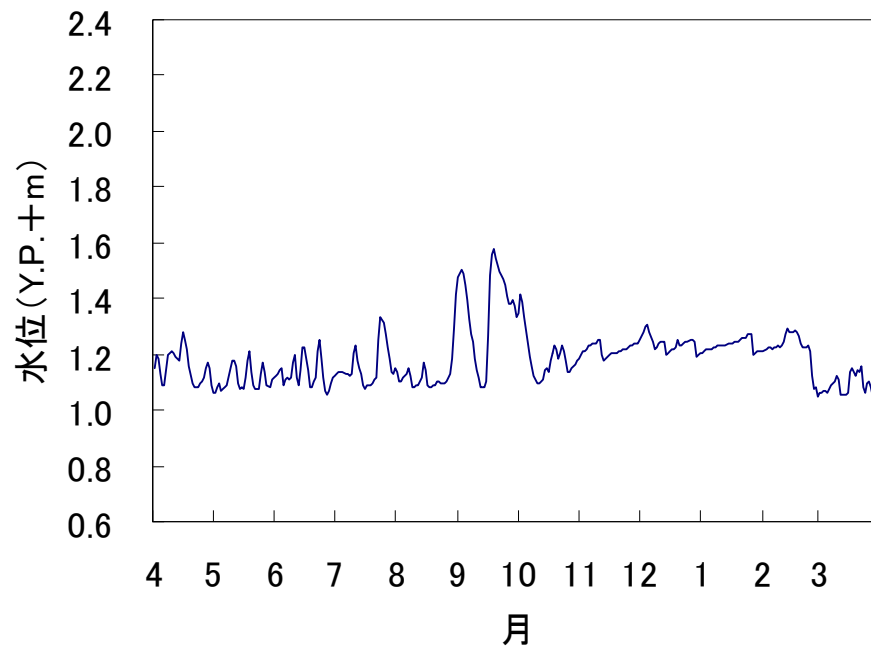


図 20. 1998 年度（平成 10 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位  
※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

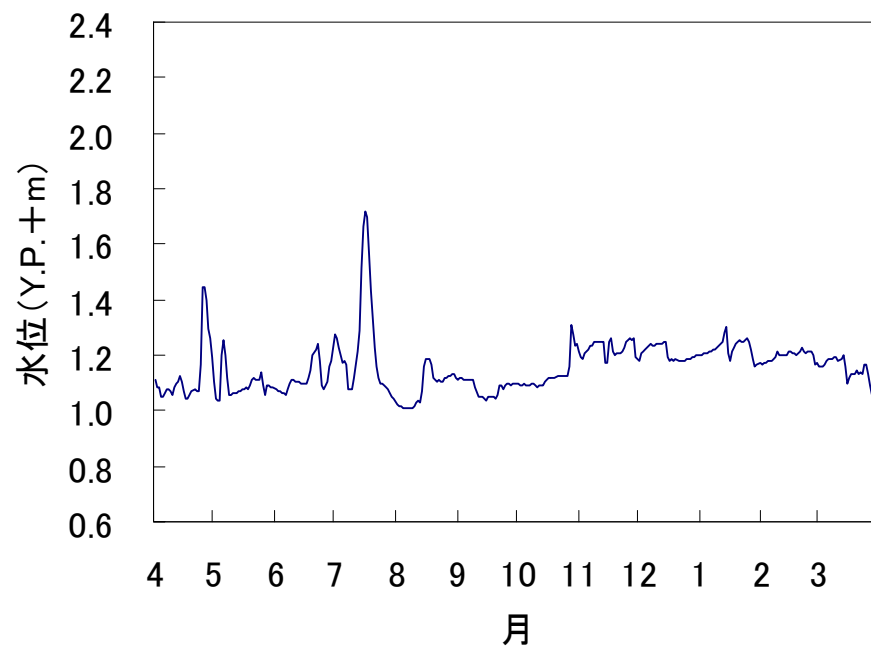


図 21. 1999 年度（平成 11 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位  
※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

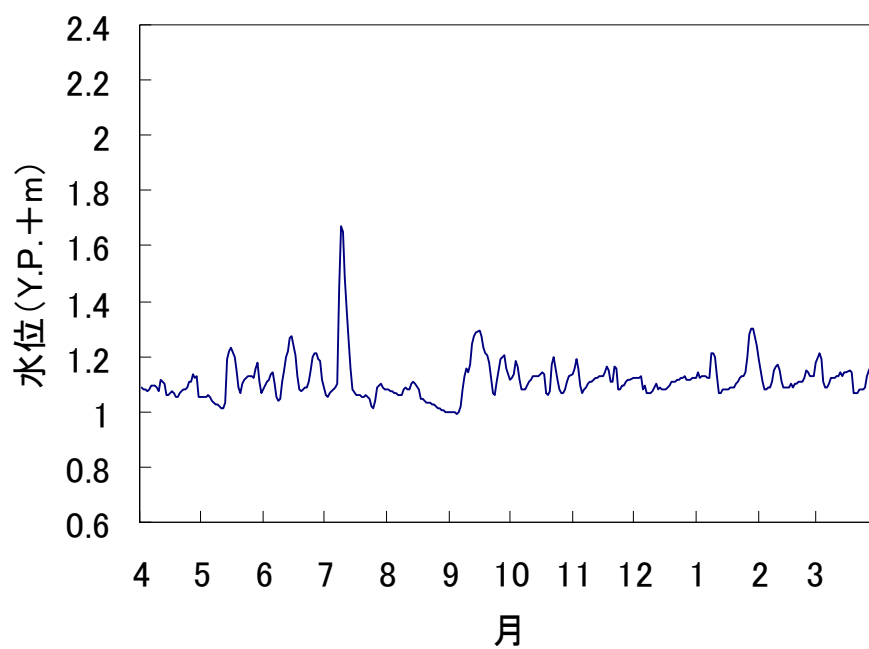


図 22. 2000 年度（平成 12 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位  
※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

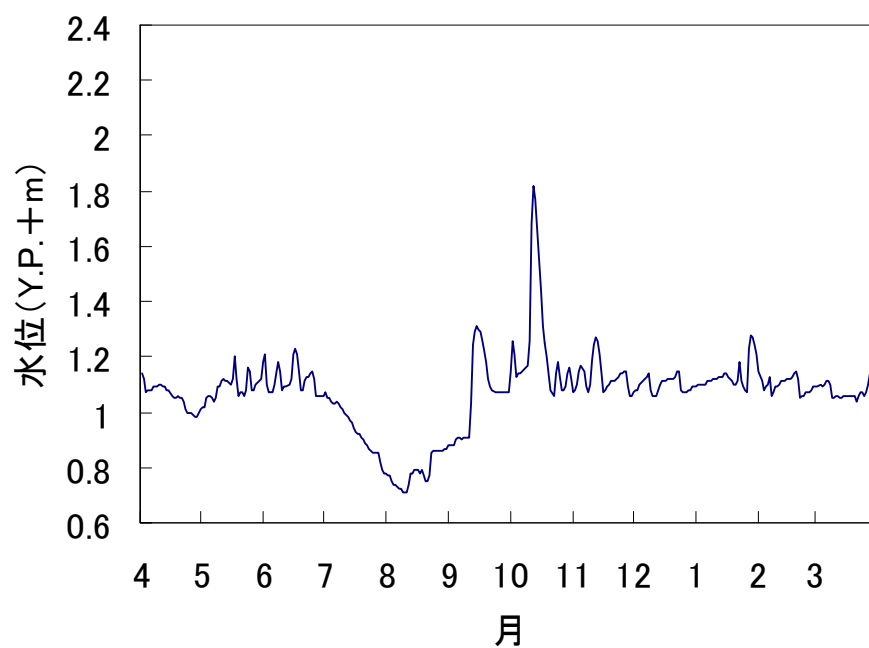


図 23. 2001 年度（平成 13 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位  
※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

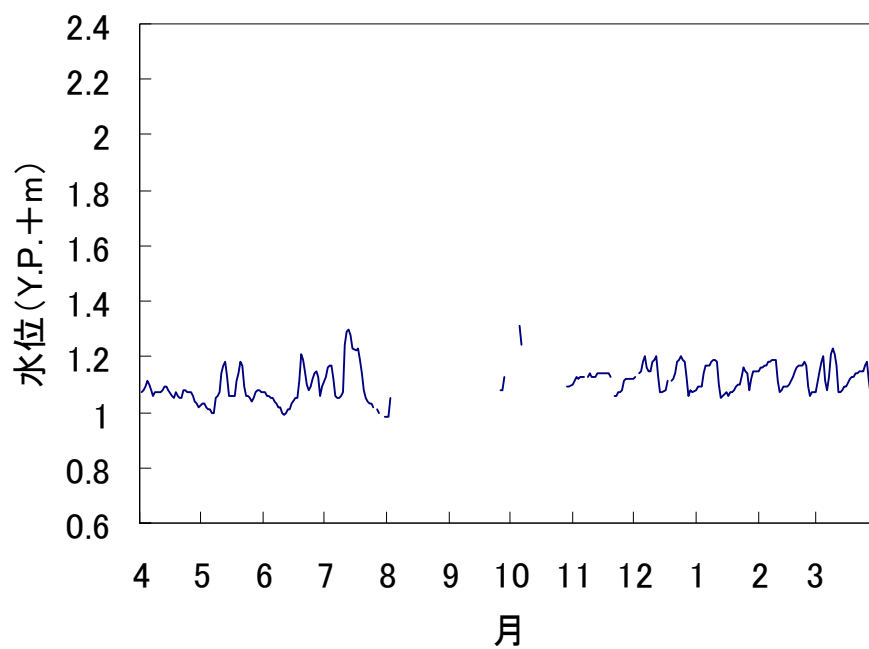


図 24. 2002 年度（平成 14 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位

※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

※ 欠損値あり

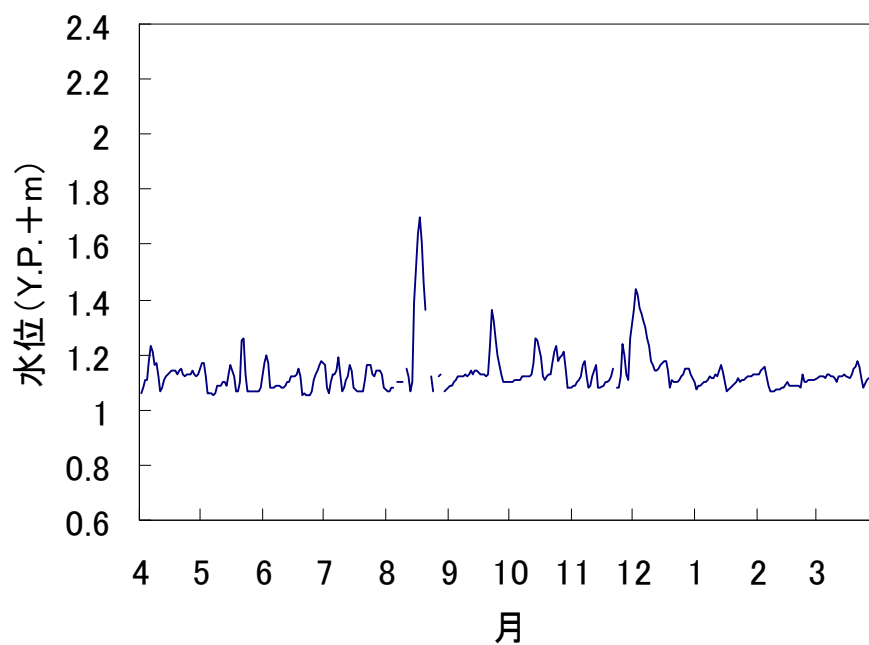


図 25. 2003 年度（平成 15 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位

※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

※ 欠損値あり

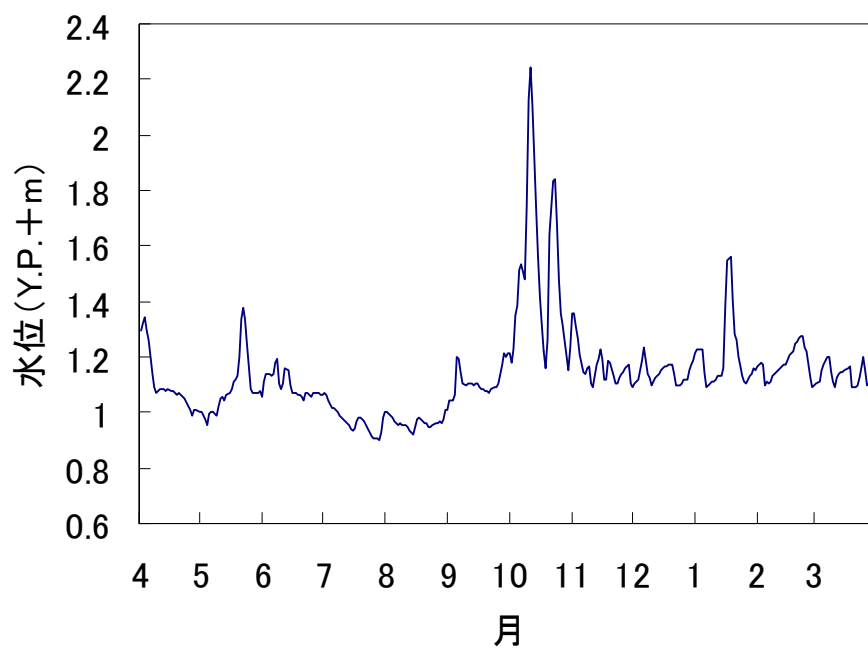


図 26. 2004 年度（平成 16 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位  
※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

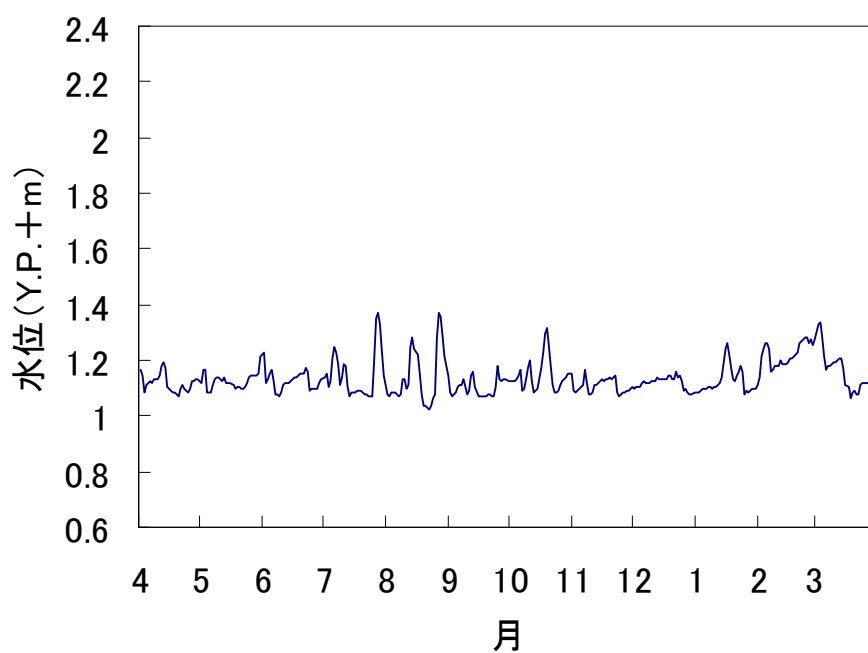


図 27. 2005 年度（平成 17 年度）における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位  
※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

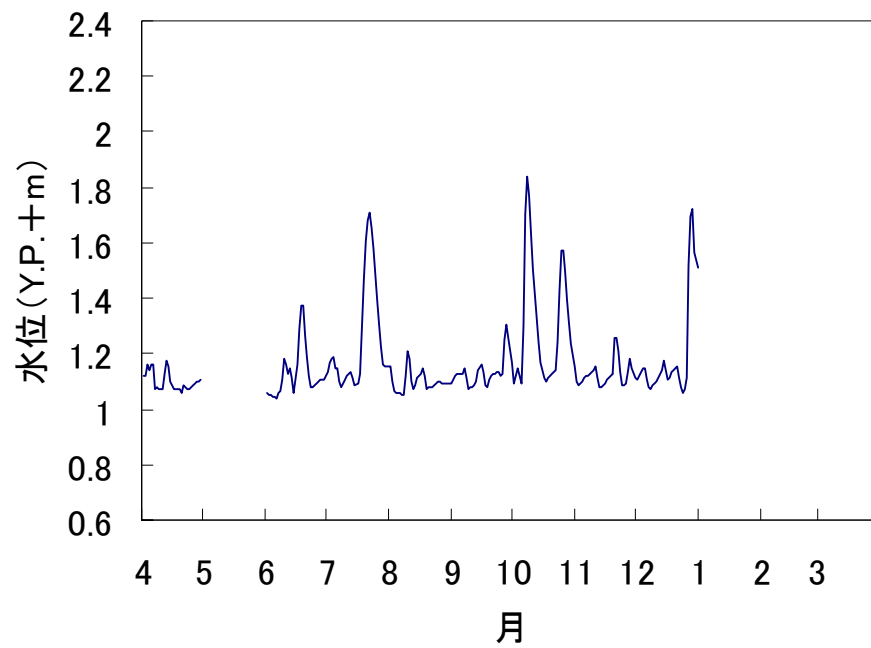


図 28. 2006 年度（平成 18 年度）4～12 月における霞ヶ浦（観測ポイント：浮島）の水位

※ 水資源機構提供データをもとに筆者作成

※ 欠損値あり

## 引用文献

### 論文・書籍等

- 秋本 勇 (1965) 桜川村郷土史資料 第壱集. 泉印刷所, 茨城
- 安藤邦廣 (1983) 茅葺きの民俗学—生活技術としての民家—. はる書房, 東京
- 浜田作衛 (1965) 桜川村郷土史資料 第貳集. 泉印刷所, 茨城
- 浜田作衛(1970) 浮島の習俗. 敬文館, 茨城
- 人見暁郎 (1974) ちょうちん酒. 敬文館, 茨城
- 人見暁郎 (1999) うきしま風土記. 敬文館, 茨城
- 人見暁郎 (出版年不明) 常陸風土記入門. 敬文館, 茨城
- 茨城大学農学部霞ヶ浦研究会 (1977) 霞ヶ浦. 三共出版株式会社, 東京
- 井上 真 (2001) 自然資源の共同管理制度としてのコモンズ. (井上真・宮内泰介編) コモンズの社会学 森・川・海の資源共同管理を考える. 新曜社, 東京, pp1-28
- 環境省 (編) (2002) 新・生物多様性国家戦略. ぎょうせい, 東京
- 鬼頭秀一 (1996) 自然保護を問い直す 環境倫理とネットワーク. ちくま新書, 東京
- 鬼頭秀一 (2007) 地域社会の暮らしから生物多様性をはかる—人文社会科学的生物多様性モニタリングの可能性. (鷲谷いづみ・鬼頭秀一編) 自然再生のための生物多様性モニタリング. 東京大学出版会, 東京
- 桑子敏夫 (2005) 風景の中の環境哲学. 東京大学出版会, 東京
- 路川宗夫・西広淳・前田修 (1992) 霞ヶ浦湖岸妙岐の鼻の植物相. 筑波の環境研究 14: 71-78
- 路川宗夫・前田修 (1994) 妙岐の鼻湿原の植生. 筑波の環境研究 15: 67-83
- 皆川朋子・島谷幸宏 (2002) 住民による自然環境評価と情報の影響—多摩川永田地区における河原の復元に向けて—. 土木学会論文集 713(VII-24): 115-129
- 宮内泰介 (編) (2006) コモンズをささえるしくみ レジティマシーの環境社会学. 新曜社, 東京

水資源開発公団霞ヶ浦開発総合管理所（2002）霞ヶ浦湖岸植生の減退要因の検討について.

「第 5 回霞ヶ浦の湖岸植生帯の保全に関する検討会資料」（財団法人河川環境管理財団編）.

水資源協会（1996）霞ヶ浦開発事業誌. 水資源開発公団霞ヶ浦開発事業建設部, 茨城

根岸盛雄・武田浩一・丹羽賢一（2002）妙岐の鼻の鳥類調査. 水の技術 9: 28-37

日本ナショナルトラスト（2003）すぐれた自然環境としての葦原・茅場の保全活用調査Ⅲ－

現存する葦原・茅場の実地調査とその保全活用への提案－. いなもと印刷,

農林水産省統計情報部（編）（2002）2000 年世界農林業センサス 農業集落カード 茨城県.

農林統計協会

リバーフロント整備センター（2002）河川水辺の国勢調査年鑑（河川編）. 山海堂, 東京

桜川村史編さん委員会（編）（1979）桜川村史考 第一号. 敬文館, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1980）桜川村史考 第二号. 敬文館, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1982）桜川村史考 第三号. 敬文館, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1983）桜川村史考 第四号. 敬文館, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1984）桜川村史考 別冊. アサヒビジネス, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1984）桜川村史考 第五号. 敬文館, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1986）桜川村史考 第六号. 桜川の民俗. 敬文館, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1987）桜川村史考 第七号. 敬文館, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1989）桜川村史考 第八号. 敬文館, 茨城

桜川村史編さん委員会（編）（1993）桜川村史考 第九号. 敬文館, 茨城

桜川村役場（1967）広報さくら川 No.78.

桜川村役場（1970）広報さくら川 No.104.

桜川村役場（1972）広報さくら川 No.118.

桜川村役場（1978）広報さくら川 No.143.

桜川村役場（1980）広報さくら川 No.165・166.

桜川村役場（1986）広報さくら川 No.227.

桜川村役場 (1987) 広報さくら川 No.241.

桜川村役場 (1990) 広報さくら川 No.273.

桜川村役場 (1991) 広報さくら川 No.285.

桜川村役場 (1994) 広報さくら川 No.322.

佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 (編) (1982) 日本の野生生物 草本

I 単子葉類. 平凡社, 東京

関 智弥・池田 宏 (2003) 霞ヶ浦におけるヨシ原の分布と低地の成り立ち. 筑波大学陸域

環境研究センター報告 4:75-88

「新利根川土地改良区 50 年史」編集委員会 (編) (2003) 新利根川土地改良区 50 年史. 長友

印刷所

鈴木龍也 (2007) 里山所有の過去・現在・未来.(丸山徳次・宮浦富保編) 里山学のすすめ <

文化としての自然>再生に向けて, 昭和堂, 東京, pp201-217

寺林暁良 (2007) 地域環境管理の歴史的変遷と視座の多層化ー青森県岩木川下流のヨシ原

を事例にー. 北海道大学人文科学科卒業論文

富田涼都 (2007) ひとや社会から考える自然再生ー自然再生はなにの「再生」なのか.(鷺谷

いづみ・鬼頭秀一編) 自然再生のための生物多様性モニタリング. 東京大学出版会, 東京

利根川下流総合管理所 (2005) 霞ヶ浦の茅が日本の伝統家屋を支える. 水とともに

20:22-23

鳥越皓之 (1997) 環境社会学の理論と実践ー生活環境主義の立場からー. 有斐閣, 東京

鷺谷いづみ・矢原徹一 (1996) 保全生態学入門 遺伝子から景観まで. 文一総合出版, 東京

渡辺敦子・鷺谷いづみ (2006) アザメの瀬自然再生事業地周辺地域の水辺環境における生物

多様性認識と事業への参加意欲に見られる世代間差. 応用生態工学 9(1):31-45

匿名 (2007) 40 年ぶりに野焼きを復活 ススキ草原の再生を目指す. グリーンパワー

346:34-35

## 空中写真画像データ

国土地理院 a『空中写真整理番号 UR1183 コース番号 A 写真番号 15』

国土地理院 b『空中写真整理番号 CKT-05-03X コース番号 8 写真番号 25』

## 新聞記事

匿名、新しいばらき朝刊『コジュリンか広域農道か 一部コースを変更 七年目、やっと和解 東村と日本野鳥の会県支部』1977 年 9 月 12 日

匿名、朝日新聞東京本社朝刊『「利根川百景」に県内から 22 ヶ所 目立つ筑波山望む地 茨城』1988 年 12 月 3 日

匿名、茨城新聞朝刊『霞ヶ浦の湿地帯「妙岐の鼻」 国定公園に指定へ』2004 年 2 月 3 日

匿名、朝日新聞東京本社朝刊『春告げる「野焼き」タヌキなど受難の一日 桜川の浮島湿原／茨城』2005 年 3 月 2 日

## インターネット掲載情報

愛知県ホームページ 「愛知県版レッドデータブック(植物編)」

<http://www.pref.aichi.jp/kankyo/sizen-ka/shizen/yasei/rdb/shizen011005/rl-syokubutsu.pdf>

廃棄物の処理及び清掃に関する法律

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S45/S45HO137.html>

稲敷市ホームページ 「稲敷市浮島財産区管理会及び稲敷市古渡財産区管理会設置に関する条例」

[http://www.city.inashiki.lg.jp/06\\_buka/01\\_soumubu/01\\_soumu/03\\_bunsyohousei-k/02\\_reiki/reiki\\_int/reiki\\_honbun/ar16801801.html](http://www.city.inashiki.lg.jp/06_buka/01_soumubu/01_soumu/03_bunsyohousei-k/02_reiki/reiki_int/reiki_honbun/ar16801801.html)

かすみがうらネット

[http://www.kasumigaura.net/usr/mizukusa/Kasumigaura/pageo\\_2/A0100.html](http://www.kasumigaura.net/usr/mizukusa/Kasumigaura/pageo_2/A0100.html)

国土交通局ホームページ 「国土画像情報検索システム」

[http://w3land.mlit.go.jp/cgi-bin/WebGIS2/WC\\_AirPhoto.cgi?IT=p&DT=n&PFN=CKT-74-12&PCN=C52&IDX=61](http://w3land.mlit.go.jp/cgi-bin/WebGIS2/WC_AirPhoto.cgi?IT=p&DT=n&PFN=CKT-74-12&PCN=C52&IDX=61)

国土交通省関東地方整備局 霞ヶ浦河川事務所ホームページ 「平成 17 年度霞ヶ浦水位運用試験の実施について」

[http://www.kasumigaura.go.jp/topic/060131\\_1/index.html](http://www.kasumigaura.go.jp/topic/060131_1/index.html)

国土交通省関東地方整備局 霞ヶ浦河川事務所ホームページ 「平成 18 年度霞ヶ浦水位運用試験の実施について」

<http://www.kasumigaura.go.jp/topic/061228/index.html>

京都府ホームページ 「京都府レッドデータブック」

<http://www9.pref.kyoto.lg.jp/kankyo/rdb/bio/db/flo0170.html>

日本のレッドデータ検索システム

<http://jpnrdp.com/index.html>

新潟県ホームページ 「レッドデータブックにいがた－新潟県の保護上重要な野生生物－」

<http://www.pref.niigata.jp/seikatsukankyo/kankyo/a/hogo/images/rdb/24.pdf>

大分県ホームページ 「レッドデータブックおおいた～大分県の絶滅のおそれのある野生生物～」

地方自治法

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S22/S22HO067.html>

栃木県ホームページ 「レッドデータブックとちぎ」

<http://www.pref.tochigi.jp/shizen/sonota/rdb/detail/05/0094.html>

富山県ホームページ 「富山県の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブックとやま)」

[http://www.pref.toyama.jp/cms\\_sec/1709/kj00000909-009-01.html](http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1709/kj00000909-009-01.html)

<http://www.pref.oita.jp/10550/reddata/data/text/89.pdf>

wikipedia 「霞ヶ浦」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9C%9E%E3%83%B6%E6%B5%A6>